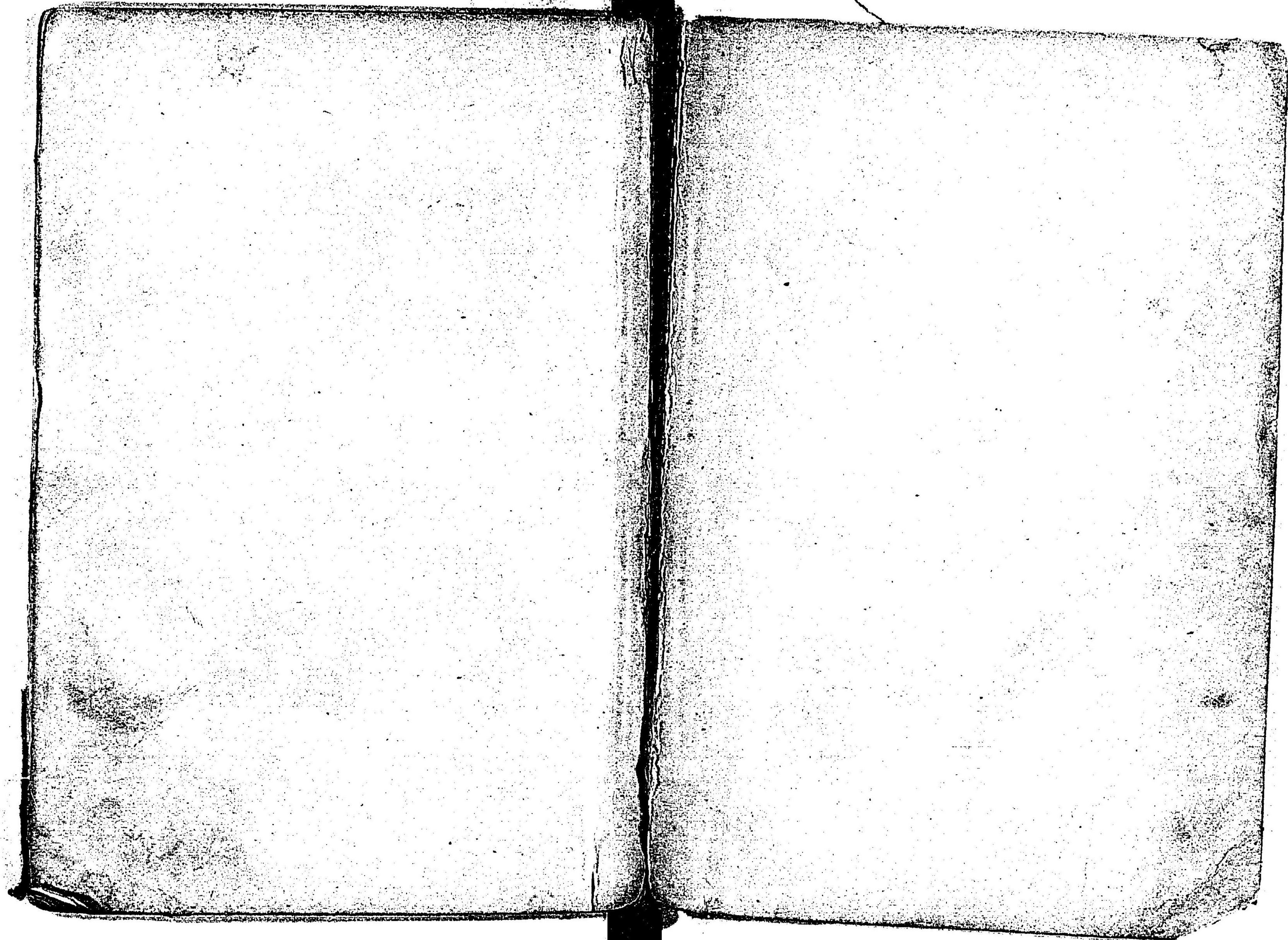


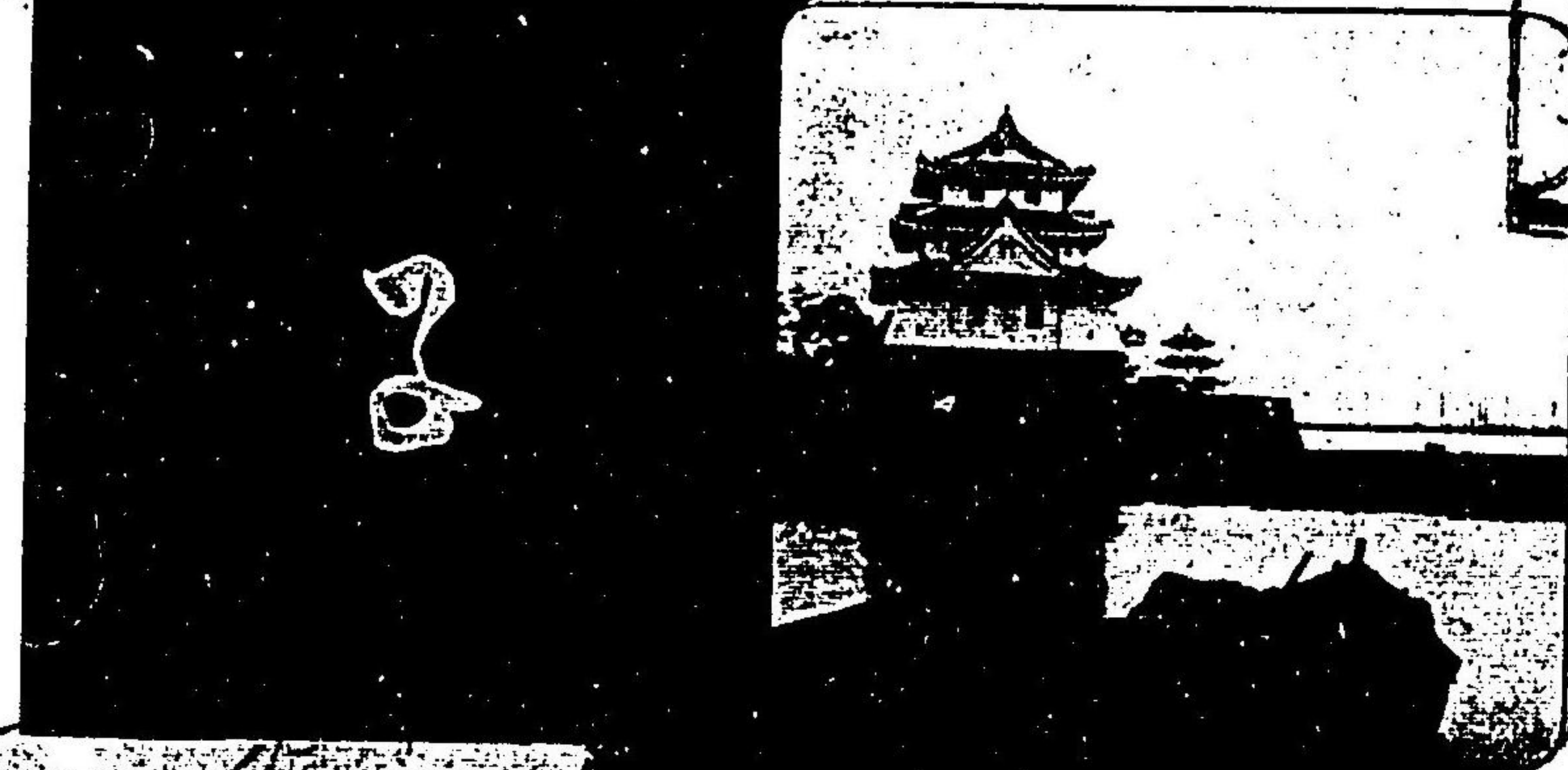
37

49

M

初子集





大橋又三郎寄贈





口上

新玉子の年立ちかへりて、生れ出でたる鶏の、
 はつね集よといはれ、それは私の領分ぢやと、
 驚に怒まるべく、兎角俳諧は季無かるべか
 らず、木ばかりあつて、實が生らずば、花咲
 かば翁にも笑はるべし。さらばこれを春の夜
 のお備膳とせんに、鼠の嫁入にし、くものなく、
 鳴くその小田の蛙すら、歌人のお仲間ならば、
 彼のさし、蜻かいなの先生も、當時流行新
 詩家の亞流ならむか。今更古書を涉獵でも
 無けれど、夫天は子に始り、地は丑に定つて、

人は寅に生ずといへば、子は乃ち萬象の頭字
 なり、そのお頭の下につく、われは本屋の白
 鼠、筆も廻れば、獨樂もまはす。オットあぶ
 ないく、こゝが千番一番の矩合なぞと、恐
 わ恐わ雑誌屋の店に、再び恥を更科の、蕎麥
 屋の恵方棚では、また唐辛子責のからい目に
 遭つて、やうやく承塵の花道へ遁げ出すを、
 追ッかくる赤面の松前が、己もたれの鼠ぢや
 めんめえと、ボカリ、批評の鐵扇を食つて、
 初寐の夢を覺ますと云爾。

子の初春

乙

羽々白す





目次

出世大黒(小説)	一
人鬼(小説)	一七
むし干(小説)	一九六
浮田一蕨(小説)	二一〇
邪正一如(小説)	二三四
戀の今様(小説)	二六〇
捨扇(小説)	二九三
西鶴是非(雜筆)	四三七

其碩と自笑(雜筆)	四五二
戯作者(雜筆)	四六二
戦捷の春(雜筆)	四七三
樽拾ひ(雜筆)	四七五
富士越の龍(雜筆)	四八五
倭モルトメ(雜筆)	四八七
正直の神戸(雜筆)	四九三
凱旋兵士(雜筆)	四九五
富士の山(雜筆)	五〇五
耶馬溪(雜筆)	五一〇

左甚五郎(雜筆)	五二二
江戸紫(雜筆)	五二三
初蒔子(雜筆)	五二六
新年行事(雜筆)	五一八
大むかふ(評説)	五二八
女壇七福神(評説)	五二九
油地獄(評説)	五三一
金波樓淨瑠璃集(評説)	五三六
鎌倉武士(評説)	五四二
歴史讀本(評説)	五四八

文便と聖天様(評説)	五五四
筆はじめ(評説)	五六〇
美人彈琴(評説)	五六五
向島春景(評説)	五六八
壯士芝居(評説)	五七〇
水遠山長(和歌)	五八三
塞山拾得(俳句)	五八八

以上

初子集

出世大黒

乙羽生著

出世大黒

今の世の紳士紳商といふは、ピヤホールの麥酒のやうに、風袋の泡を除けては、正味が三分、表面は硝子仕掛の、奇麗に見せども、懐中の冷たい歯が浮くやうな、男ばかりある、その仲通りのツイ横町に、小さな骨董屋を業としつ、この頃の不景氣から、それにつけても金の欲しさよとて、一生懸命に大黒天を

信仰する龜屋萬兵衛といふ堅氣者あり。堅木といへば檜、栗の木、その栗までが、涼車の枕木になる當世向に、これは潰しの利かぬ朴の木齒の日和下駄を穿き滅して、埃ッ買ひに精出せど、身代は七ツ下り、あれ上前が下つてゐますと、ちと出過たる妻のさし出口を氣にも止めず、小心者のいつも着る萬筋の羽織に、布風呂敷を抱へて、また買ひ出しに出でけるが、冬の日の釣瓶落し、何時の間にか暗くなつて、小石川は傳通院の往還に、そこが蕎麥屋のアンドウ坂。あア出前の提灯を見るにつけても、お腹が空いてたまらぬ、今日は運悪う堀出し物も無く、この儘ブラリと家に歸つたなら、また山の神の機嫌を損ねやう

が、此頃のやうに喰ひ込みばかり立つ鳥では、跡を濁さぬ所ではなうて、驚が騒を覗ふ時のやうに、首を長藤の煙管筒、さうく脂下つても居られない、序と云つては失禮だが日頃信心する大黒天様、その傳通院のは、特に靈驗が顯著だと聞いたによつて、一つ參詣して、懇ろに祈念を凝らさんものと、足早に駆けつけしが、ホイこれはしまつた、門が明かぬわ、よし、今の世の中は、お願ひ申す一條と來たら、諸事裏口のこと、妙な處で發明して、横手から暗闇を、のそりくと階段に上り込み、先づ開運の手附に、賽錢などお渡し申さうかと、慾の皮の裏口を開くれば、不思議やな一條の白氣、バツと立つ

たは自雷火か、將た自雷也か、何んでも無い、われはこれ大黒
 天なり。此頃信仰も懸直ある人の心に、御利益ばかりを現金に
 願ふが多く、縁日、甲子杯の朝夕は、耳に瘡の出来るほど、慾
 の祈願をかけたくも、賢く立廻はるもの而已なる世間に、一風
 變りたる其方は、面白い男なり、云ふ事あらば何んでも聞かう、
 今夜は帳合を濟まして、重荷も下して、打寛いでゐる處ぢや、
 申せ、申せ、ナンと出世がしたいと、それは好い心懸けである、
 先づ金が欲しいと云ふ者には、この小槌を振る、また玉のやう
 な子が欲しいといへば、小間使ひの唐子でも遣らうが、たゞ出
 世がしたいとばかりでは、さうよ、俗にも出世の門立出といふ

から、まア兎も角も、こゝを出て散歩などいたさうか。へい、
 私もお供をいたしませうが、その御服装では、支那人坊主と間
 違はれませう、せめてお頭巾でもお除り遊ばしては如何か。否
 々、これを退ければ、この藥罐が……アハ、。それは何うもお
 氣の毒様で御座ります、そこで何處へお出ましなさるか。知れ
 た事よ、不忍へ。ハ、ア、辨天さんの御宅までいせう。其方察
 しがいいな、三人寄れば文珠の智慧といふが、辨天さんなら膝
 ども談合、アハ、萬兵衛行かうと、後邊に置いた布の袋を、
 ヨイどまかせと肩に引つかくるを、それは私が持ちませうと
 手を出せば、構つて呉れるな、中味を退けて、袋ばかり持つて

行くわ。それがよろしう御座いませう、時にも旦那御相談が御座います。何んぞ用か。へい實はその、貴君が袋を肩にかけてゐなされては一向妙で御座いませんから、物は相談、何うで御座いませう、貴君の藥罐の湯氣を瓦斯の代りに、この袋の中に詰め込み、風船玉にこしらへて、二人とも宙乗をして、一足飛びに不忍の御宅へ参りませうよ。萬兵衛、それは妙々、サアこの袋で風船を造らうといふ事になり、いろく工夫の末、やがて出来上りたるは布風船、共々それにつかまりて、風のまよに、舞臺は變る雲の幕、萬兵衛は下界を覗いて見て、遠い、ニコライも切通もモウ見えな。

中

金があつて、男が好ければ、大抵な戀は出来合ひの夫婦鍋、萬事は錢が物を夕暮の格子先に、たゝか、カ、と手真似して、口を利けぬ啞でさへも、親指と人差指とを輪にすれば、圓う相方と納まるのも、みな戎様のお庇陰ぢやと、下界では無上に難有がれど、七福神の仲間では、一向にモテない役廻なり。生地を問へば攝州は西の宮、神主友成の一人息子なりしが、その性釣を好まれて、直ぐ近所なる住吉の浦へ、朝な夕なに絲を垂れては、いつも飯粒で鯛を釣竿と番とを離した事のないほど、斯道の好者なれど、さうく何時迄も若様で遊んでゐらるゝ譯のも

のにあらねば、難波の津の銀行員となりて、直垂のタレを前垂のタレに代えたるに、人品も氣高く、福相ではあり、殊に家筋も好い所から、いたく頭取の氣に入りて、東京の支店長とまで出世しき。用ゐられるれば慢ずる心の起り、少しはいける口の、酒も好きになりて、春の夜の更けては、月も朧なる中に、何處やら花の香のする不忍の馬場を、酔の未だ醒めねばこそ、ぶらり／＼と散歩しけるに、折からころと駒足駄の音輕やかに、出の衣裳を襷とりたる藝者一人、つらく箱丁も居らぬに、それも微酔を寒からぬ夜風に醒まさんとてか、月面白う池の水を彩りて、畫樓の燈の波の底を蘸すが如き美景の中を、蓮歩を移し

て來かゝりぬ。これは悪くからぬ優男、彼れは固より廣寒宮の嫦娥かと思はるゝほどの麗はしさ、互に顔を合したる機をキツかけに、木の頭を迂り出でたり春の月、粹を利かして、これより戀の序幕となりぬ。素性を問へば、相州は江の島の社守、由緒ある家に生れながら、貧は諸道の妨げとなりて、天成の麗質、美しくしいだけが身の仇となり、藝に助けらるゝほどの不仕合は、門の口の御神燈に、晴着の裾模様を見らるゝ身となりぬ。此方はまた他人の憐に涙ぐむ程應揚なる性質の、話し合せて見れば馴染も早く、あいたい／＼が病み附きとなりて、これには醫者もヒを投げ、首傾けて見物する間に、男も女も借金嵩みて、嵌

り込んだる儘の川、戎は遂に銀行を免職になつて、行き所無き
長火鉢、灰に文字書く向ふ側は、好いた二人がさし向ひ、樂し
み鍋のどち蓋も、人の噂のハツとして、座敷の口は秋の暮、時
雨て歸へるとり膳に、虧け徳利の枯木立、やうく淋しくなり
行けば、最負の客も足敷を、引く汐あればさし潮の、上々吉の
馴染といふは、彼の大黒天の君なりけり。今日は未だ鬼の來ぬ
間の小酒盛して、奥の離亭に隠れ簀、首尾も好いやさ、戎は猪
口を女にさして、私はもう呑めぬ、大抵にして切り上げないと、
また例のが遣つて來て、五月蠅いことであらう、それを思へば、
この結構なお酒も喉には通らぬ、お辨ホンにお前は仕合者だ、

わアいふ大富豪を旦那にして、この年の暮も、何處を風が吹く
といふ顔が憎らしいと、冷罵顔に云へば、お辨は身を震はして
涙聲、そのおつしやりやうがお怨めしい、これもお前さんと相
談づく、お金の欲しいばかりで、こんな家業をいたします
る、實に浮世は儘ならぬ、好いたお前が浮氣で短氣で、えい自
烈躰と、寄り添ふ途端に門外に人聲。おう、噂をすれば米櫃の
影がさした、これは大變、わアこれは大變ぢや。

下

戀には愁を連は邪魔と、大黒天は萬兵衛を戸外に待たし置き、
われ一人好い男氣取で、お辨の家のお奥の間に通れば、彼方は態

と沈着拂つて、おやまア大黒さんには、ようこそその御入來、このお寒いのに、お頭巾一つで、外套も召さずでは、さぞお困りなされたらう、幸ひこゝに有合の酒肴、わしは逢はれぬ辛らさの自暴呑み二三杯、元來が不調法な口の、こんなに好い色になりました、さアあ一つと、猪口を献して酌をする。お辨、さう注いで散るわく、お前何時見ても美しくいいう、その好い色、ホ、私もその好い色になりたいものぢや、今日は取巻も連れず一騎駆けの御出陣ぢやから、少と三味線など弾いて、陽氣に騒がして呉れ、お前何やら浮かぬ顔をしてゐるが、また借錢の屈托が、心配には及ばぬ、この私が附いてゐるからは、

寶船に乗つた氣であるがよい、あア大晦日が近うなつて、世間一躰の大不景氣、銀行では利息を上げざる、商賣はボンヤリする、そこでこの私へ繪馬上げ願ほどきで無うて、護摩上げ願持て來か、アハ、實に眞言秘密の宅では、油臭うて居たいまれぬ、こゝに斯うして手提靴代りの小槌を側に置くからは、一に寶を降り撒いて、二に莞爾と笑アらつてと、これを斯う振れば財寶は山と湧くわ、下界では廓の金に詰まるが習ひと、人情本で見えてゐたが、私の方では傾城買の金主でもしてやりたい位ぢや、これくお辨、さう置き注ぎでは閉口する、いくら大酒家でも立續けの五六本には、ゲツブ、酔ふて、酔ふて、泥龜屋

の萬兵衛は何うしたといへば、萬兵衛何時の間にか、裏口に廻つてゐて、障子越に此方を見ながら、ハイ、ハイ、此方に控へ居ります。其方は草履取の萬兵衛か、そこに屈んで何しておぢやる。お旦那に申上げます。何事ぢや。何事とはお情けな、今鳴つたのは上野の十二時、翌日は甲子の縁日では御座りませぬか、早くお酒を切上げて、サア御歸館遊ばしませと急ぎ立つれど、大黒天は尻落着けて。投つて置け、私が留守は白鼠の忠助が名代ぢや、喃お辨、其方の傍を去たうないわ、早くお前に鐵漿つけさせて、大豆の飯に豆の汁、蓬の箸のトリ膳に、二人仲好う暮らして見たいと、お辨の膝を枕にして、囁語にまでも

庵摩訶迦、夢か現か他愛も無ければ、萬兵衛獨り氣を揉んで。それでは困る、翌日の要事が埒明かぬ、よし／＼寧ろこの小槌を借出して、白鼠の忠助さんに名代を頼んだなら、御利益傳授に事欠くまいと合點して、辨天さんにも事情を打明け、戸外に出づれば、門の柱に風船玉は繫いであり、主人の名代借馬車ならぬ風船玉に、乗るが早いか手綱を断れば、虚空遙かに飛んで行く。面白いぞ、他人の物なれどこの小槌を一振ふれば、大判小判の花が咲いて、下界の枯木に初霞が柵引くわ、やアあれは歳の市のカンテラか、何んだ人を馬鹿にしてゐるなぞと、頻りに悦に入る折から、ガタリと障る箒川、また轉覆かど吃驚

する機に、小槌を下界に落したり。サア困つた、何うしてやら
うと、泣き面に木の枝を攫んで、血眼になつて四方を見れば、
風船玉は箒のやうになつた大學裏の枯木に止まつて、身動きも
ならぬ木の股の萬兵衛、下を見れば月が明るう照して、小槌も
そこに落ちてあれど、下りるには階子かなし、大地に十丈程も
あれば、何か無いかと、手探りにさぐり見るに、麻繩か何んぞ
のやうに千歳の葛葛がからんである、これこそ天の賜よと、萬
兵衛それにつかまりながら、嬉し紛れに出世のつるやと一聲呼
べば、いえ私共は龜屋萬兵衛で御座いますと、女房が門の戸
を明けの春風、ふくはめでたし、く。 (年末新作)

入

鬼

一

世の中は包む錦繡の皮一重なり、菊之蒸が美貌も年波の寄るに
つれて、水の流れに齊しき行末ぞうたてき。されども堺町豊
屋町の賑はひは、春の花秋の月の色をも奪ひて、人寄せの太鼓
に天地開け、歌舞音曲の妙なる調には、迦陵頻伽も雲の節穴が
ら、下界迤に瞰下して、御殿女中の身を羨むべし。
春狂言の曾我から續く人氣を受けて、時は今なる秋の當り興行
に、幟の數の幾本かを増して、虚空に五色の雲を靡かせ、茶屋

が欄干の緋毛氈は、歸り咲の花筵、浮るゝ客は蝶なれや、別て
 武士の命は、君が御馬前の塵となる迄の、預りものなるをも忘
 れ、我が魂の大小をも、送りの若い衆に打任せて、鶉の中の捨
 物となり、肩身を狭くして見物する程の凄まじき勢力は、渠河
 原者と嘲けらるゝ世間の口とは雲泥の差あり。
 こゝは浮世の裏表、場所の繁華を他所に見る樂屋新道の露路口
 に、佐野川市藏といふ若女形あり、臙脂の色どり粉膩の粧ほひ、
 細腰たをやかに姿華奢なればいたく御殿女中の意に適ひ、着る
 振袖はその儘戀の文箱と化けて、茶屋に呼ぶ人恋び來る人、た
 いの一日も絶ゆる間なく、冥加に餘る男なり。

今日もまた果ての太鼓を聞き流して、小屋をユツツリ抜け出で
 たる市藏、御最負様とぢやれついで人目を包む引幕は、さる筋
 からの進物なれば、今宵は御禮廻にぢやと、仲間の手前を躰好
 く繕ひ、また誰やらと隠れ首尾の、留守居するはち幣と云ふ老
 婆のみ。

一籠の鈴虫に秋の淋しさを知らるゝに、櫻燈籠の濛朧せる燈光
 は、盆栽に灑ぎし露の玉に閃きて、宛がら硝子に螢入れたらん
 如し、萩もて編める袖垣には、錦の蔦をからませて、狩衣の袖
 めかせば、裾には武者立の襷に、五日ばかりの月の、隣家の屋
 根の廂を這りて、重箱ほどの庭に黒き影を落しぬ、固より土一

升しやうに金かね一升しやうの大おほ江え戸この中央ちゆうなれば、地面ぢめん家か作さくの廣ひろく大たいなるを望のぞまんやうはなけれど、家いへの構つくり造り庭ばの手て入いれに通つうなる所ところを見みせて、侍さむらい町ちやう人じんにも真ま似ねの出で來きぬ點てんは此こゝ處ところぞと、よろづに伊い達たてを盡つくせり。

鏡かがみの如ごとく拭ぬぐひ光ひからしたる縁えん類がたに出いで、煙たばこ草くさ寐ねむげに吹ふき居ゐるは、五ご十じゆ歳さいばかりにもなるらん老婆らうばのお幣ぬさなり、月つき明ありに庭にわの景色けしきの面おも白しろきに眼めも配くれず、茫ぼん然ぜんと襟きん頸けいを縮ちぢめて、自じ烈れつ躰たさうに欠か伸のびしながら。あア馬ば鹿か々々しい、藝げい人じんの宅うちに奉ほう公こうする位くらゐつまらぬものはない、碌ろくゾつばう給きよ金ぎんも呉くれず、用よう事じと云いつたら寝ねる間まも無ない程ほど忙いそがしい、ソリヤア親おや方かたは賣う物ものぢやから、椎し茸たけのこ

鬘たばに買かはれて、したい法ほう題だいの面おも白しろい事こともするし、宅うちへ歸かへつては直すぐに二に十じゆ一いち、鶏とりが啼ないても夜よが明あけても、そんな事ことには頓とん着ちやくなしだ、勝かつ手てな時ときに寢ねて起おきて、贅ぜい澤たくの吐つき法ほう題だいを何なにんとも思おもはないが、妾めかけのやうな奉ほう公こう人じんは困こまつて仕し舞まふ、その癖くせ給きよ金ぎんの外ほかと云いつたら、鏝ぶつ三さん文ぶん呉くれもしねえで、躰ていのいゝ事ことばかり云いひくさる、あアつくく、他人ひとの宅うちに居ゐるのは厭いとや、妾めかけもモウ少ちやうとは小こ金かねも溜たまつたから、高かう利りの金かねでも貸かしつけて、身み代しろを作つくりたいものだ、何い日ひまでも他人ひとに追おひつかはるゝ身み分ぶんでは、百ひゃく歳さいになつても天あま窓まどが上あらない、あア世よの中なかは萬ばん事じは金かねの事ことだよ、それはさうと今いま夜やは格かく別べつ遅ちいが、また据す膳ぜんの旨こゝろい汗あせを、ホソに今いまの世よの中なか

は女で飯を喰ふことだ、妾も此家から暇が出たら、何んな商賣を始めやう、陰間屋か、比丘尼屋か、高利の金を貸すか、マア一つ考ひものだと獨り語時、磨きの格子戸さらりと開けて、送りと共に立歸る市藏。婆アや今戻つた。

二

箱根以東の化物とは若女形の打扮ぞかし、今門の戸をさらりと開けて入來る市藏の姿、娘かと思ふに、髪を髻下に結ひたり、野郎かと訝ければ、年輩や、老けたり。送りの若い衆に、家の紋打つたる提灯持たして、しやなりくと歩む態は、海棠の露に濡れたる如く、女にしても見ま欲しかりき。時は涼風に秋て

ふ名は立てども、未だ寒しといふ頃にもあらねば、市松染の浴衣を裾長に着流して、京人形のやうな足頸に、紅天鷲絨の鼻緒すげたる黒塗の木履を穿き鳴らし、足音揃へて通ふ姿の艶なる、藤色縮緬の綿入羽織は、文金風の流行につれて長く、紐は牡丹掛と云をつけたり、源氏車を浮織にしたる花色純子の帯に、鬱金山繭の帯上げをびめ、懐中したるは猩々緋に、花鳥の縫箔せる三徳なり、首筋すらりと細く、顔は瓜核にして、眼元に無量の愛嬌溢れぬ、黒き髪を髻下に結ひ、額に野郎帽子をかけて、薄化粧を施したり、年の頃は十八九、二十歳とは上らざるべし、口紅させし具合、衣裳の襟を透して、片手に襪をとれる鹽梅、

これが男子かど、道に摺れ違ふ人の驚かざるはなし。市藏が芝居よりの戻り、茶屋からの送り届けの折には近所の娘、後家、乃至は三迄も浮き立たせて二階から覗くもあれば、部の際より見るもあり、さればこれの多く出入する町内には、貼立の障子にも舌舐めずりせる人目ありて、壁に耳、障子に目とは此處より出でたる諺なる由、斯うした人氣のありながら、人毎に一つの癖はあるものとして、二十一は下手の横好き、何日も仲間にして遣られて、阿魔よりの仕着せ身に着く事なく、祝儀は賽の目に潰れて、借金で首が廻らぬとか、市藏今も我家に歸るや否、舞臺や茶屋でする仕打とはぐわらりと變り、野郎帽子

をとつて投げ退け、郡内縞の胴衣に白博多の帯をべめかへ、純子の座布団に座りて、朱羅宇の長煙管に一服喫ひつけ、弟子と共に衣裳を疊み居るお幣に向ひ。婆や、今夜も中島屋の兄哥が来るから、例のやうに用意して置きな、今度こそ天下分目の合戦ゆる、推茸鬚などがやつて來ても、そこはお前が氣を利かして、躰好く斷り歸して呉れ、サア市助來い、兄哥の來るまで、二三番やらうぢやないか、芝居なら本讀といふ處を、大畧やつて置いて、來たら一番勝五郎、程の仇討でもしざアなるまいと、打笑みて弟子市助と共に、一間へツイと雲隠れ丁か半か吳か越か。

お幣は近所の仕出屋にて、一猪口の準備を整へんと、裏口から走り出で、肴屋へ駆けつけ、用を達して家に戻るに、間もなく賭博のお仲間、仲島屋といふ敵役の入来れば、一間に通して後、酒よ肴よと立騒ぎぬ。

月未だ落ちで柳蔭、風觸て影の亂るゝ門口の外に、袖頭巾もて顔を掩ひ、人目忍びて佇立む者あり、お幣は早くも目にとめて、また戀ゆゑに身を焦し、火に迷ひ入る夏の虫か、虫でも心があゝるならば、小粒の一つも持つて来て、しんみりと頼まば、親方を取持つまいものでもないが、さうでなければ安達の臺辭ぢやないけれど、物貰ひなら仲間衆に貰はひで、お庭前にむさぐる

しいと、腹の中にてせゝら笑ふを、戸外の人には羞かし氣に、容易く此方へ入り来らず、もぢくしてはさし覗き、一足行きては振り顧へるを、お幣はなほもぢらし置き、窃と裏から抜けて出で門口の方へ辿り行きぬ。

三

忍ぶ戀の果敢なさは、月にも遠慮の袖頭巾蒙りて、男の家の格子先に立寄りながら、未だ一面の識無き身の了得に、言語などかけかねては、幾度か室内さし覗くに、其人の聲は聞えずして、たゞ勝手口の下女と覺しき老婆の、盃盤を調へ居るは、一間に客のあるゆゑなるべし、さるにてもその客は男か女かと、市藏

が家の邊を狂氣の如く、そろ／＼と徘徊するは、未だ色香深き後家なりけり。

室内にはお幣老婆のそれを見つけて、臺所口から一寸と出で、女性の様子を右見左見つ、もし貴君様何んぞ失せ物でも御座いましたかど、氣つかれて見て初めて人あるに驚き、挨拶に當惑して、いえ、ツイこの御近所までと遁口を求め、横を向きてお幣の顔を見れば、肝癢衰やせしか、見るから慳貪なる相を現はし、鐵槩の元げし前齒を剥き出して、さうですかとせ、ラ笑ひながら、他人を外さぬ愛嬌口、少とお寄り遊ばしませと云ひつゝ家に入り、馬鹿／＼しい、その肚胸で役者と色が出来るもの

かど、肚の中では毒ついて戸をひしやりとめぬ。

後家は一足退きたれど、さりとても此儘歸るは残り惜しと、またそろ／＼と足を運ばせ、佐野川の家さし覗けば、お幣は神棚に供へたる燈明を、團扇の風に煽ぎ消しつゝ、今一間より出で來たる弟子の咲松を、談話の相手に抑へつけて、戸外に怪しきものありといふ。

怪しき者とは曲者かど、咲松眼を丸くして問ふを、お幣は騒々しい静にせと制しながら、いえ、怪しきものと云うても、人殺し、強盜などの限にあらず、頭巾蒙りたる戀の曲者なりといへば、咲松フ、と鼻で返辭し、親方の家へ戀の曲者の押込むこと

は珍らしくならず、それを大層らしく持かけるは、何んぞ毛色の變つた鳥か。毛色までは夜目ゆゑ確と判らねど、何うやら白晝の鼻のやうにもぢくして門の中にも這入りかねる風情、打扮を見れば絹布ぐるみ、いづれ商家の若後家など、黒い眼で睨んだが、供をもつれず、茶屋からの案内もなく、ぬうツと來た處を見れば、戀には戀じ連は邪魔ど、長松を途中から戻し、そうして北野の天神さん、飛梅ならで飛び立つ思ひがしませうよ、底で一つ役者を買ふには、斯うく手筈を定めねば、買はれぬものと教へてやり、櫻の一つも禮に貰ひたいと、慾深き口を咲松打消して、いゝえ、今夜は到底も叶ふまい、大分親方の旗色

が好いので、喜んで居る眞最中ゆゑ、斷るのが知れてゐる、しかし親方は好い腕があるねえ、二十一に負けたからツて、女といふ後楯がありやア、戦場へ出て不評は取らねえ、ところで何うだ、婆アさん、私なんざア陰間屋でも抱へ人は無からうかね。さうよなアも前ぢやア何うも客足がつくまいよ、仕方がないから、矢張馬の脚は篋り役と諦るがいゝ。おい馬鹿にして呉れでない、私はこれまで馬なんぞを勤めた事はありません、斯う見えても、こんな花車なお役者様を攫まへて、云ひたい法題の事を云ひ腐ると怖となれば、お幣は蝦腰になつて煙草喫しながら。咲ちやん腹が立つたら勘忍おし、まア好い子だから、

泣いてお呉れでないよ。止しやアがれ、人を茶かしてけツカ
 る、腰拔老婆めと云ひつゝ、茶簞筥の上に懸けてある三味線を
 外し、手に持せて弾き初め、「戀といふ字に身を捨小舟、何處へ
 取つく島とてもなし、鳥部山は其方ぞと、死に行く身の後髪、
 弾く三味線は祇園町」と、唄うて樂むその傍には、お幣老婆が
 面白からぬ面色して、煙草の煙を狼煙に吹くのみ。
 戸外には俄に聞ゆる音曲に、後家は歸へりかけたる足引きかへ
 して、聞ともなしに窓下に立ちすくめば、落ちかゝる月長く地
 に影を引きて、我身の脊丈三丈餘に見え、天水桶の下にゐる斑
 狗迄が、此方の姿を目に留めて、吠え出さんずる見暮なり。

折しもお幣は戸外の戸締りを堅めんとて立出づるに、以前の女
 中はなほ檐下に佇立みて、人の氣色に驚く様子を、ちらとその
 顔覗き込めば、羞かしさうに俯向きて、お幣を手真似で戸蔭に
 呼びぬ、此方もさる者、何ぞ御用と立寄れば、紙に包みしお捨
 りを少々ばかりと出すまゝ、押戴いて手に取るに、ザクリと音
 して重量あり、これは何うした福德の百年目、恵方は此方で無か
 つた筈だがと、訝かりながら愛相つくり、齷を出しての造り笑
 ひ、ホ、ホ、これはく、お有難う、そして貴女様は今夜親方に
 御用事があつしやるので御座いませうが、生憎仲間の役者
 衆と色氣なしのお遊び中ゆゑ、何方様があらしつてもお断り申

上げよとの吩咐、明晩ならば茶屋吾妻から口をおかけ遊ばしても、万事は妾と送りの若い衆が承知の上、御合點が参つたら、さうした都合になされませ、お待遠では御座いませうが、咲く間が花でござんすよと、辭の調子も祝儀の利目で叮嚀に教へて返し、歸り際に門口に立て、金の包を開いて見れば、入る月の光に露置くものは何ぞ、櫻を白紙に一ひねり、今夜も有卦に入つた哩と闇に向けて舌をへろり。

四

昔西鶴は賞めけり、澤村某と云ふ若女形、或日河内藤井寺の開帳へ行きしに、終日竹輿に揺られて血暈が起りしと、芙蓉の

貌に眉を皺めたるを、よくぞ申されたり、稚きより形も詞も女の如くならんと、日頃にたしなみたれば、僻初の頭痛をしほらしくもしか云ひしとて、其頃いたく評判しけり、斯程の心掛なりしかば、其技に至らぬ隈も無かりしが、それより降りては、年々自墮落になりて、舞臺にては優しくも見ゆれど、常の身持は今日も明後日も、鮫鞘の大脇差をぼつこみ、腕まくりして、茶腕で清左をもぢりちらし、無上にたれをかきさがしまはした跡での、はりこみ悪たい、舞臺で見た時の仕打とは、お月さまと菱餅、下駄と人魂程違ふとは、源内が悪口雑言なり。こゝに佐野川市藏は本町通藥種問屋の若後家に、深くも思ひ慕

はれて、先方から運ぶも百度も、結ぶの神の引合せか、お幣老婆のお目にとまりて鼻薬の機能には、云ひ出さぬ中から、夫と察して戀の梯をつくつて呉れ、ザア此方へ入らつしやいませと、手を引かぬばかりに、後家は茶屋の二階へ上げられ、未だ初めての斯うした身は、敵の陣中に擒となりて、大將の見參に入らぬ前の心地なり。

根は見えて垣根越の松ケ枝、二階の窓に横はりて、粹を利かしてか、人目を掩ひて其儘の幕儿帳、月皎々とさし昇りては、葉影障子にさつと映りて、墨繪の額を懸けたらん如く、欄干に懸れて下さし覗けば、春日燈籠の笠のみ見えて、風鈴の檐を騒が

すあり、多くもあらぬ白萩は、雪洞の火影を射けて、頭のはら／＼と滴り、桐の葉の半ばは裂て、ぼろ／＼になりたるが、風に揺られて板塀を叩く音物静かなり、後家はたい極り悪げに、なるべくは闇の方に顔さし寄せて、談話相手の來よかしと待つ處へ、小紋の羽織着たる男、梯子の上り鼻に、土蜘蛛のやうに時宜して、親方には只今これへと云ひつゝ、二三尺膝行寄りて、もう月が昇りましたなど他言を云ひ、思ひ出したやうに先刻は大勢へお心づけあり難う存じますと、また蝦腰になりて、扇を膝の上に半開き、結構な晩で御座ります、當所も晝の中は御存じ様の雜踏いたしますので、御女中様方はいづれも御夜遊はか

り遊ばします、親方衆も夜分になりましては、何人もお暇であ
らつしやるので、舞臺では見られぬ藝も遊ばしまして、それは
く一しほのお慰みで御座ります、へいへい毎度御最負様に預
ります、なほこの末ともお引立を……へいナニ藝人など、申
しますものは、御最負様の御聲掛け一ツで立つて居るもので御
座いますと云ひつゝ持てる扇を後家の前に薦め、これは親方の
定紋がついてある扇、少と戀風におあやかり遊ばすやう御進上
申ます、親方も奥様のお手が觸れましたなら、無ぞ喜びますと
で御座りませうと、愛嬌賣るは佐野川の送りの若い衆、本田天
窓を乙に捻りて銀煙管脂下りに啣える方の側なるべし。

親方さんがと云ふ女中の聲につれて、頓て階子をしどくと登
り来る市藏、今宵は一入嬋妍に着飾りて、石地藏も震ひつささ
うな美しくしさ、舞臺で見るとは格別の趣ありて、燈臺の火影
に照り、顔少し素俯けて扣ゆる様の艶なる、櫻の花の月に溢れ
て、影白うなるかと怪しまるゝに、唇にさしたる紅の、優しう
光りて露落つるかと疑がはるゝ有様を、後家は見ぬ振の眼の、
眩むが如く思はれて、酬されし盃を只譚も無く、膝の上に廻し
て見て、小兒の昔に返りやしけん、色氣もなげに見えけり。
座に侍る女中も、相手は初會と見てとりて、取捌きも妙に味を
付け、市藏と後家の間に氣を置かしめず、傍にある三味線を進

めて、親方さん何んぞ色氣たつぶりなのをと望めば、市藏は一寸と辭儀して、眼を後家の方に注ぎ、先づ奥様からと三味線をとり、サアお心意氣をと促せども、座に居るさへも不氣味の後家の、如何で歌など唄はるべき、何うぞ聞かして下さいますも、茲一生の大出来なり、市藏笑みつゝ、しばらくお隠し遊ばします、そんならこれをと猪口を洗つて献せば、後家はうけ取り、我知らず押戴くを、女中は氣轉に合榼入れてホ、サア〜三々九度のお盃事の始まり〜。

五

閻魔王も金轡に黙り、鵜目鷹目も袖の下に、眼を細くして見ぬ

振の横道へ迂り込む、世に黄金程尊きものはなし、佛様も金箔が兀げ給ふては、屑イ〜の籠の中に愛目を見給ふ。ああ、妾もこれから金を溜めて、三界の面白味を一身に聚め、なるならば須彌山の上の風入れの好き所に別荘建て、葭町からは野郎の篩つて美しいのを、鐵道懸けて呼び寄せ、南瞻部洲を箱庭に見立て、遊びたきものなり、それを何ぞや、他人の家に厄介になり居ては、田鼠の日光に照れる如く、何時までも天窗の上らぬ仕儀と、お幣老婆が決心凄まじく、前なる人を擲きのめしても、金を儲け、火水の中に飛び込んで、遺たる物を拾ふ覺悟、この時の面相繪にしたら、心の鬼は正しくもこれか。

小春の空に歸り咲きの梅櫻の囀は、貸本讀んで茶の湯に腹を鳴らす隠居の囀に上り、お供の長松が裙端折りて、墓參を名どしての遊山の、お附に連れらるゝ節ともなれば、日和は秋とは思はれぬ程の麗らかさ、諸鳥梢に歛り、梧桐裂けて衣全からざるも、紅葉雨を喚ぶに至らず、今日も晴れたる檐下に小娘の集りて、手鞠唄謠ふも優し。お幣老婆の慾には隙なき身ながらも、今日は如何にしけん、しばらくも佛參をと思ひ立ち、先づ淺草觀世音へと急ぎぬ。

終日夜もすがら追ひ遣はるゝ奉公人の身の、今日ばかりは籠の鳥の雲井に羽を伸す心地して、淺草藏前にさしかゝるに、札差

の家檐を並べて、いづれも大家ならぬはなし、向ふを拵と見てやれば、一團の人立、足並揃へて、此方をさして來るあり、塵高く舞ふて、紛々として雲の如く、僧あり俗あるは、何物ぞと巷の片側に立寄りて眺むるに、初めは諸侯の行列なんど見たりしが、漸う近づくに従ひ、いと美事なる葬式なるを知りぬ。

銅鑼、鐃鉢の音聞えて、天女の樂を奏づるにや、七丈袈裟かけたる僧に引續き、龍紋の麻上下着たる男、左右二行に立列びて、龍燈高く掲げ、四花眞先に立てぬ、線香捧げ持つ女の童は、一様に黒縮緬の振の小袖の、裾に落花流水をぼかしたる紋付を着け、紅絹の脚絆を穿き、棺を納めし輿物の脇には、白無垢着た

る女性の桃色紗の被衣被りて、四人二行に附添ひぬ、前後の行列、美々しきこと町人の葬式とは思はれず、お幣老婆も遠くこの體を見て、さても立派なるもの哉と、眼を離さず見物しけり。

近づくまゝになほ熱く見れば、美々しけれども禮儀なく、孰れも華奢を競ひたれば、見る目も哀ならぬは、可笑し、惣じてこの頃の風俗、見榮一方に傾きて、譬へば親の棺の跡に立ながら、腰なで擦り、身振繕ひて、見る人の膺を片耳に挟む、されば茶筌髪水色の上下は、芝居で腹切る時の真似、脇指の柄を紙で巻くは、何んの心か譯が判らぬ、死後に華を飾る家の若旦那の、

金儲けの道知る者は無く、何の道傾城買ひに實が入りて、紙衣着る身を粹と心得る馬鹿者が、葬式の筋道に黄金を撒きて、亡き親達にまで阿呆の名を負はすると同じ事ぢやと、お幣苦り切つて眉根を寄せぬ。

わいゝと騒ぎ立つる見物、その中に交りて何人の葬式かと聞くに、商賣は札差の某とて、土地に名代の分限者の、主人を吊ふ野邊送りなりといふ、供揃ひははやお幣の前に近づき、足下波の如く揃ひて一二町が間は上下の水色に地を染めなしたり、折しも一陣の暴風忽然と吹き起り、棺の上に懸け置きたる白無垢の、如何したりけん、翩翻と捲き上りて虚空迥かに飛び去り、

白鷺天に朝する如く、暫時は舞ひに舞ふたりしが、アレよくと云ふ間もなく、ひらくと下り來りて、お幣が天窓にフワリと落れば、吉凶悪るしと遁げんとする間に、五體にヒタリと纏綿ひぬ、行列に立たる人々、皆一齊に手に汗握りて、此後如何になり行く事と、眼も放たずして見てあれば、お幣は白無垢手早く脱ぎて小脇に抱へ、顔は青褪め、眼は血ばしりて、切齒しながら駈け來り、輿物の脇ににぎり寄りて、夜叉のやうなる大音張上げ。施主さん待つた。

六

翩翻と飛び來りし白無垢を、お幣が脱ぎ捨てたる時の見暮は、

武者繪に残る鬼童丸が、獸の皮を引被りて頼光朝臣を野末に覘ひ寄りけんも、これには及ぶまじく思はれて、その物凄さ云ふばかりなきに、輿脇の女性は身震して恐ろしがり、被衣裳れる儘うろくくと、立騒ぐ様は、女郎花の露を厭ふに似たり。得たりと覘入るお幣は立塞る人々を掻き分けて、棺の間近く進み寄り、施主殿に逢ひましょと大音揚ぐるに一同荒膽を挫かれ、誰一人立出で言譯する者無ければ、此方は益々腹を立て、施主殿は居ませぬか、施主は居らぬか、無縁の佛ぢやあるまいし、施主の無い葬式もあるまい、犬猫を葬るにも飼主が無くてはならぬ筈、施主に逢ふて云ふ事ありと呆れて立つ人を睨んで、

大地に撞と座りたり。

唯さへ物見高き江戸の町のそりや新佛に魔が魅して、棺にかけ
た白無垢に翼が生ひ、虚空に飛んで往來の老婆幽霊が魅入つた
と、譯も無き言を囁し立て、立騒げば、一犬の虚に萬犬實を吠
へ。それ手前も見よ、其方にも覗けど、紺屋の職人、酒屋の樽
拾ひ杯、我もくど一番に蒐け入りて面白氣に見物す。

行列の供に立ちたる男に、骨あるは上下のみと見えて、掃明け
んとする者一人もなく、只右往左往に列を亂して、お幣の顔を
見詰むるのみ、益々集ひ來る人の足に塵舞ふて、黒煙漲る如く、
どりくどりに噴する世間の口は、百千の蚊の鳴くかと疑はれて、

擾々紛々、果てし無くこそ見えけれ。

折から譜代の管頭にや、天窓少し元げかゝりたる男が、恐る
く人前に進み出で、慇懃に小腰を屈めて、只今は圖らざる粗
忽をいたしましたが、御覽の通りの次第ゆゑ、よろしく御勘辨
を願ひます、いづれ歸宅の上にて、幾重にもお詫び仕ります
と、辭を卑ふし詫びすれば、お幣は茲ぞと圖に乗りて、お前さ
んは施主殿か、施主殿なら云ふて聞かせやうが、この白無垢は
此方の佛のお召物、如何に風が吹き飛ばしたとは云へ、妾に縁
あればこそ身に纏ひたれ、妾も寄る年波の五十三、もう死神に
どりつかれてからは、百までもと思ふた命も書餅だ、これが犬

往生の知らせなればこそ、親類でもないこの老婆に死人の白無垢、あア縁喜が悪い、斯ふと知るなら、四年以前亡くなつた老爺も、所々に往生して仕舞ふものを、所詮長命の出来ぬものならば、今茲で舌を噛み切つて死にます、一樹の蔭さへ他生の縁ぢや、その佛さんと一つ棺に埋めて呉れど、老の涙か、空泣きか、麻の葉形の襦袢の袖に時雨降らして立去るべき氣色も見えず、見物次第に集ひ來て、人の波湧くが如く、出入の職人、爲の者さへ制し難めば、了得の大道も往來弗と止りぬ。詫に出でたる管頭も、お幣の難題に戦として、言ひ譯する所か、狐鼠くと引込むを、老婆その袖を抑へて、後生だから、一つ

棺に入れて呉れと云ふに、私は手代の勘八、一存で計りかぬると答ふれば、施主で無い管頭に用事は無いと、凄まじき眼して睨みぬ。夕陽は向ふの土藏を照りかへして、秋とは云へど眼眩しき程のまとも照りに、お幣老婆は汗に五臓を浸され、巷の塵頭に飛びかゝりて、宛がら盤若の面の如く、白髪交りの髪顔れかゝりて頬に垂れ、凄味を含める眼は血走りて、底に厭らしき光を藏しぬ、右の糸切齒の少しく唇の外にはみ出で、物云ふ毎に鐵漿元げし痕の見ゆるなど、その面魂の一癖あるべきに、商家の生白い若者が怖れ呆るゝも無理ならず。

間もなく見物動搖めきて、それ今度こそ旦那が出たと立騒ぐにつれ、人掻き分けて出来る施主、上下の折目正しく、曲れる人にあらぬ事は、氣向き人相にても知られぬ、手代二人を兩脇に附添はせ、徐々とお幣の前に至りて大地に跪きて兩手をつき。私しは施主の某、仔細あつて名は申しませぬが、只今は容易ならぬ不都合の段々、平に御宥免を願ひますと云ひつゝ、一人の手代に金子十五兩包みたるを竊にも幣の袂に押込ませ、只管に御免のみ云ひ續くるに、此邊が幕の引き所とお幣も出しかけた白無垢を押疊み。そのお詫びには及びませぬが、老ひの我儘、成るならばお佛様と御一所に、冥土とやらへ行かぬ氣になりし

が、施主が呉々詫びらるゝのに、出来ない相談してもなるまい、ドリヤ家へ歸つて御回向でもして、後生願ひをいたしませう、そしてこの白無垢は妾が貰ふて屑屋に……イヤ〜縁ある佛と思つて朝夕念佛いたします、南無阿彌陀〜と、袂の金を遺さぬやうに、手首にかけし球數と共に握りめて、其場を悠々と立去る様の膽太さ、列み居る者共たゞ呆れ果て、後姿の見ゆるまで見瞻りしが、掻き鳴らす銅羅の音にまた足踏を揃へ、野邊に送る花一枝、それと輿物を昇ぎ上ぐれば、見物の散るは紅葉の秋の暮にも似たり。

何屋が十八番の一枚摺ど、肖像繪までも世の人に好かる、役者の身は、姿こそ花なれ、装婆には兎角人形喰ひの娘多く、後家も最負の紋つける紙煙草入を嬉しがりて、親方がと鼻で息を吹きかくるもあり。されば渠朝湯の摩磨きに、小半日を費してお顔から後光が射すとは、さても尊とい御本尊かな。春の晨の心地よき、花も風情ある程庭に溢れて白く、枝より枝に飛び交ふ雀の、笙簫築の音を立て、晏起する人の夢を驚かしむ。お幣は忙て、起きて雨戸繰り開ければ、知らぬ間に甘露の雨も霽れて柔らかに照る朝日影の、梢に残る車を彩り、はらくと白銀の珠玉を震ひ落すめり。天高く風穩かにして、暑さ寒さも肌には

應へね程の陽氣とて、藝售る程の男の床離れ悪く市藏は眼覺して煙草火を呼び、長煙管に二三服喫ふて枕屏風に陽炎を吹きかけ、哥麻呂の繪の裙を臚にして寝ながらに反魂香を燻く思ひしぬる床の中、寐心好きにまた、一寐入して頓て飼猫の日向に狂ふ頃目を覺せば出入の着屋裏口に来て、粗板に躍る大鯛を庖丁する鹽梅の興ある、これでこそ日本橋の住居は諸事金の事なれ。太夫さんお早う御座いますと呼ばれて市藏は弗と臺所口を覗けば、ねじり額巻男ましげなる着屋の庖丁逆手にどり、皿持て立てるお幣老婆に、外に何んぞと云はねばかりの顔色、市藏はその鮫鯨をど望めば、皮多き所のみを撰みて出しぬ。

房楊枝^{ふやうじ} 脚^{くわ}へて椽側^{せんがは}の洗嗽^{せんじゆ}場に立てば、買^かひ水^{みづ}の清^{きよ}きが備^び前^{ぜん}焼^{やき}の
 瓶^{かみ}に溢^{あふ}れて、耳^{みみ}盥^{たらひ}、かけ手拭^{てぬぐい}まで一つとして淨^{きよ}からぬはなし、
 糠袋^{ぬかふくろ}の新^{あたら}らしきに手拭^{てぬぐい}持^もて近所^{きんじよ}なる櫻湯^{さくらゆ}に行^いき、山椒^{さんせう}程^{ほど}のヒリ
 、ツとした湯^ゆに入^いり、緋^ひ吳^ご絹^{きぬ}の切^きに、五^ご躰^{たい}を矢^や摺^{すり}りにかけて寒^{かん}
 玉^{ぎよく}の日に晒^{さら}せるよりも白^{しろ}し、浴^ゆみし果^はて、は、爪^{つめ}磨^こり櫛^{くし}用^{よう}ひ、
 化粧^{けしやう}、身^み繕^{つくろ}ひ、男^{おとこ}の見^み榮^えの五^ご月^{げつ}蠅^{せう}ものなるに口^{くち}紅^{べに}までを注^そて、
 朝^{あさ}風^{かぜ}に袖^{そで}を靡^{なび}かして歩^あくその姿^{すがた}、行^ゆく春^{はる}の名^な残^{ざり}を惜^{おし}む女^{にょ}性^{せい}のあ
 るも宜^えなり。

家^{いへ}に歸^{かへ}れば神^{かみ}棚^{たな}には燈^{あかり}明^み供^{こう}へありて、花^{くわ}瓶^{びん}に未^まだ買^かひ立^たての
 花^{はな}の美^{うら}くしきを挿^さしぬ、市^{いち}藏^{ざう}は新^{あらた}に神^{かみ}酒^{しゆ}を清^{せい}正^{しやう}公^{こう}に捧^たげて、負^ま

けぬ氣^きの技^{わざ}を祈^{いの}り、裏^{うら}口^{ぐち}を見^みれば鰻^{うなぎ}屋^やの岡^{おか}持^{もち}、蕎^{そば}麥^ま屋^やの蒸^{せい}籠^{ろう}の、
 未^まだ其^{その}儘^{まま}の出^いしありて、昨^{きの}夜^よの勝^{しょう}負^ふを思^{おも}ひ出^ださせぬ。

市^{いち}藏^{ざう}今^{いま}朝^{あさ}は機^き嫌^{けん}克^くからず、優^{やさ}しき顔^{かほ}も間^ま々^ま鬼^{おに}に變^かることあり
 て、お幣^{ぬさば}老^{らう}婆^ばさへ手^てに持^もて餘^{あま}すこと少^{すく}なからず、昨^{きの}夜^よは首^{しゆ}尾^びの惡^{あく}
 かりけん、不^ふ興^{きやう}氣^きに勝^{せん}に向^{むか}ひても、例^{れい}日^{にち}のやうに口^{くち}も利^りかね
 ば、腫^{しゆり}物^{ぶつ}に觸^{さわ}る心^{こころ}地^ぢして家^{いへ}内^{ない}の者^{もの}は身^みを緬^{ちん}め心^{こころ}怖^{おそ}おて、今^{いま}もや
 雷^{かみなり}の墮^{おち}落^りなんかを待^{まち}つもの、如^{ごと}し。折^{をり}から苦^{にが}々^々しき一^{ひと}聲^{こゑ}に婆^ばア
 やと呼^よぶ、お幣^{ぬさ}はそりやお出^いでなすツたと、腹^{はら}で可^を笑^{かし}く思^{おも}ひな
 がらも出^でて見^みれば、市^{いち}藏^{ざう}はシツと尻^{しり}目^めにかけ、昨^{きの}夜^よの事^{こと}を今^{いま}改^{あらた}
 めて取^とり上^あげて云^いふぢやないが、お前^{まへ}は近^{ちか}頃^{ころ}してくれる仕^し事^{ごと}に實^み

が入らず、何うやらそはくして居るやうだが、私に氣に喰ぬ
 ことがあつたら、包まず云つて貰ひたい、それに何うしたもの
 か、品物に入つ當りでもする様子、所詮私の宅に望みが無いと
 思ふなら、暇もやるし、心任せにもする、近頃は十分お金子も
 溜つた様子ぢやから、私の家のやうな處では、何うせお齒にも
 合ふまいと云ふに、お幣も日頃の目的を話して、暇もらうのが
 此時ぢやと、一生懸命の勇氣を振ひ、實は妾もお庇蔭様で小金
 も少々溜りましたから、これから比丘尼屋でも始め、金儲けを
 しやうと思つて居りましたが、長年お世話様になりました御恩
 も送らずに、この儘お暇を貰ひますのは、恩知らずの人非人

と云はれますかと、それが心配でと云へば、市藏は呆れ果て、
 ナニ暇貰ひたい、コリヤ面白い、勝手に出て行け。

八

傾城買ふた果は、紙衣着るに極りしものならば、役者に狂ふ若
 後家は、如何に浮身を糞すべき。本町通りの藥種問屋武藏屋に
 お冬といふ後家あり、元は左程に身元の正しきものならざりし
 を、其家の主人連添ふ女房の、木枯に吹き落されて、桐一葉の
 哀れ淋しき闇の中に、射す月の影を伴ひて、夢に鴛鴦の睦む所
 を見けるより、後妻は持つまじと遺言を堅く誓ひたる心の、何
 日しか解け初めて、弗と房州邊より召抱へ置きたる中働きのお

冬に手がつき因果の種を蒔きてよりは、一類一家の手前にも、今は家内と披露せずば言譯無きに立至りしより、出入の床屋の媒妁するを、向風に帆を揚ぐる幸にして、終に高砂の謠一節、前齒かけたる旦那殿に、孫ほど年の違ふ妻を迎へぬ。これを見て三月節句の内裏雜に、土人形を添はせしやうぢやと、他人の口には戸の閉てられぬ噂取沙汰、斯くしてお冬玉の輿に乗りてよりは、味噌漉下げて豆腐買ふ煩ひもなく、奉公人数多つかふて、奥様扱ひせらるゝ果報も、旦那様のお隠れ遊ばしてからは、若旦那どの間思はしからず、云ひ争ひの數ある中にも、産の氣つきて男の兒を生みけるが、娑婆の風の肌さはり悪しかり

けん、七夜の祝ひしぬる夕、出氣にて未來の人となりぬ。それからはお冬浮世の事を興なく思ふての出來心、弗と役者買ふ氣になりて、粹なる人に仲立を頼みしに、金で仕上るに人目も義理も邪魔するもの無く、墓參、物見を名としての隠れ遊びに、旦那より貰ひ溜たる金子は遣ひ果し、手元不通になるにつけ、斯の道の味の一入面白ふなりて、行末の事など露しも思はず、遂には道ならぬ金も遣て、儘になる戀を貪る程に、何時しか若旦那の耳に入り、そは怪しからぬ行爲することよ、渠召仕への中より父上に引上られて、假にも我の母と名のつく以上は、一家の人の手本となるべき程の行儀を見すべきに、我等の眼を忍

て、役者狂ひするは不埒千萬なりと、以ての外に腹を立て、直様一類評議の末、家法を紊す者なりとて、何程かの手當金を與へ離縁しけり。

斯かればお冬、結句肩身の廣ふなりたるを喜び、昨日までは鳥鐘怨みたる心の、今日は天下晴れての上々首尾と、茶屋の二階に入浸りて、身の秋に近づくも、知らずで浮かるゝ、蟬の淺猿しさよ。

磁石は鐵を吸ふ力あれども、鉛をもて代へたらんには、更に其効あるを見ず、お冬も本町様の奥様と仲居にまでも追従せられし頃は、萬事意の如くなりて、他人は辛らしといふ戀を、妾に

は斯程に容易かと思ひし程なりしが、家に離れ徳に遠ざかりて、減るものは有金、積るものは帳場の仕切と、諸事轉比例に狂ひては、呼びし役者の足も、三度は一度と遠ざかり、二度かけて逢はぬ日の間々なるに、自暴の酒を飲み、見せつけの華奢もするに、次第に懷中に香露少なくなりて、後には蝶も來ず、蜂も巢つくらず、牡丹の下葉は漸う枯れて、厭らしき虫のつきける。

汗粒々働き續けてさへ、貧乏に追ひ立てらるゝ世辭辛らき娑婆に、浮かれて遊んで、辻裾の合ふ程の佐渡の土持てる人のあるべき様は無く、粹は身を喰ふ辻占の通り、お冬も果は明日にも

弱る境界に陥りて、さて何をして口を糊せうかと、考へても女の
 狼智恵、踏ん込みてッツと身を墮し、揚屋の鴉母に入込むべ
 き勇氣も出ず、其儘に日を送れば、今は一寸も動けぬまでの必
 迫、固より浮々した性根とて、未は好い思案も出さず、えい儘
 よ、世間に女人の餘り物のないのは、色といふものがあるゆゑ
 なりと、揚句の果は魔界に墮落す。
 桂庵に至りて、月極めの妾の口を探せど、都合のよき處もなく、
 ごろりしやりりと、暖昧屋の四疊半に寐轉んで、爪弾の太棹に
 徒然を遣りつゝ、吹きぐる運を待てば、轉んで來る儲け口に、
 頬邊を羽二重餅で撫でるやうなものなく、遂にある小紋羽織の

口入にて、菱町の比丘尼屋へ半年を限りての試し奉公、聲とお
 面の好いのを執處にして、抱へ主給金を煩はずみけり。

九

人の心の我儘さよ、鰻屋で漬物をねだるは、瓏を獲て蜀を望む
 の比例に齊しく、總じて花も江南の一枝は、一指を截られても、
 折りたき人情の嵩じて、あの色も厭や、この戀も面白からず、
 賣女、野郎も錢臭うて興なしと退て、經を讀み鉦を叩くべき歌
 比丘尼を弄ぶに至るこそ濁れる世の是非も無き。

よろづ葭町の繁昌は、堺町萱屋町の賑はひをうけて、海ならば
 波真額に引汐留場、色の羨のいろ／＼ありて、暖昧茶屋は云ふ

までもなく、首尾の待合、陰間屋の奥二階、比丘尼宿の圓行燈、
 いづれも奇ならず、珍ならずといふものなく、夜の明けぬ國も
 がなと思ふ世界は、こゝに越したる土地は無し、そが中にて殊
 の外最負多きは、お幣老婆が烏屋といふ家なりけり。
 家は玄治店の向ふ裏にありて、豚飼ふべき程の手狭きに、六七
 人の抱へあり、いづれも天窓ばかりの僧形にして、自墮落なる
 こと私窩子にも劣れり、斯かれは自然と顔色の麗はしきは少な
 く、冬瓜舟を見るやうぢやと、地廻りの悪口を不快に思ひ、お
 幣も何うぞして、呼び物になるべき程の、美しい玉を仕入れたい
 ものと、女衞する男に頼み置けば、上々吉飛切の品物ありと觸

込みて、引連れ來りし女を誰ぞと見るに、お冬がなれる果の今
 日ぞと知られぬ、月極めの妾の目見えに行くにすら、なほ且つ
 屠所の羊の思ひするものを、お冬は如何に零落の淵に沈めりと
 は云へ、人間の皮被れる者にある間敷き事の、色比丘尼となる
 かと思へば、流石に冥利の恐ろしくて、我知らず身も震はれけ
 り、路々も我が行く先は何のやうな家にて、抱主は邪慳な人に
 はあらざるか、いづれ人のせぬ非道の働きして、世に立つ方の
 慈悲深きはあらざるべしと、一回は濁江に染みしもの、根ま
 で腐らねば、少とは分別の心も出で、唯行末の恐ろしさに悄
 々と歩めば、路行く人も振顧りて、寒に凍ゆる雀の、鷹に攫ま

れて飛ぶかと噂する者あるを聞きぬ。
 其家に至る間にも、比丘尼の中宿より歸るに行逢ひ、野郎が湯
 上りの姿を見て、妾もあの淺猿しき仲間に入るにやと、思ひ續
 けて兎角してお幣の家に着きぬ。
 差支が無いかと、女衞先づ入口の暖簾に顔さし入れて、お婆ア
 さん、品物を連れて來たが、這入つても大事ないかと云へば、
 お幣は長火鉢の前に座りて、臺所口に居る小比丘尼を叱り散ら
 せし煙草の手を止め、ナニ目見えの女だ、大事無いから、サア
 上つて下さいとの聲に、お冬も共に上り鼻に座りて時宜すれ
 ば、お幣は凄しい目にて一ト睨み、女衞はこの別嬪ならと鼻を蠢

めかせば、お幣はあア嵌りさうだが、年は幾歳だと喫みかけた
 煙草の壳を拂うて問ふを、女衞はコーツと云ひつゝ、願に手をあ
 て一ウニウ三トと指を屈つて見て、巳年だと云つたねとお冬に
 確め、サウよ、恰度二十三になりますお比丘尼の二十二三な
 ら、お詔向と云ふ所だと賞むれば、お幣は白き齒を見せて笑
 ひぬ。
 一服喫つてまた見ぬ振の横目をお冬の顔に注ぎ、まア今度のは
 大丈夫だらうが、二三日借りて置かうかと云ふを、女衞は氣の
 重さうな返事して、そりアいけません、此家さんの二三日は定
 り文句だ、今度のはその手で承知の出來ない足の早い別嬪で、

この夕刻にも口があるのぢや、好いならいし、いけねえなら悪
 けねえと云つて貰ひまじよ、他人が抱へると云ふぢやなし、お
 前さんがお前さんの氣に入つたものを抱へるのに、文句は入ら
 ねえぢやねえか、斯ふ云ふと他人様の花を踏みつけるやうだ
 が、お前さんの家に今居る品物では、烏屋の看板になるものは
 ありませんぜ、何うか今日のはウンと云つて引取つて下せま
 し、これまでも大分初物くで、お客さんに七十五日生き延び
 させましたぜと云はれてお幣は不興顔、肝癢の遣り場を臺所に
 見つけ、比丘尼に落度あれかしと目を注げば、籠の前に啾々と
 泣く小娘あり、お幣は何んと思ひしや、突然立て襟頸掴み、朱

羅宇の煙管振上げて。やいお龜、未だ泣いてるな、何が口惜い、
 撲たれて口惜くば、お飯を喰べる程の稼ぎをしろ、いけずう
 くしい阿魔だと、續けさまの撲ち打擲、無残やこれが人間業
 か
 珠數爪繰りながら浮氣する人の慰みには、歌比丘尼こそうつて
 つけなれ、昔時は熊野に勸進比丘尼ありて、地獄極樂の繪解し
 て、愚蒙の人の眼を開かせ血の池の汚穢をいませて、石女の哀
 を泣せしが、いつの程よりか隠し白粉薄紅つけて、付髪帽子に
 巾廣帯をへめ、賣色の身となり下り、丹前節を籠に合せて唄ひ、
 人の心を誑らかすものとなりけり。されば中將姫が當麻のむか

し床しかりし姿も、世と共に下卑て、見るさへなかくに思はしけれど、人は奇を好むの心より、この比丘尼いたく世間に弄ばれて、飛鳥山の花に小唄謠ひ、雜司ヶ谷の秋に午王箱抱へて物乞ふを興ありと稱へ、後には霞町にそれ賣る家出來て、中宿に春を喚ぶに至りぬ、されば好色の餘り家を子息に任して、其身は仕送り活計の樂隱居の、したい三昧の野樂盡す人なんと、佛法臭いところが妙と、念佛唱へて棺桶に片足突ツかけながら、斯道ばかりは忘れぬものと見えたり。

烏屋の抱へち冬比丘尼が、内所にも様つきのお客といふは、油町の呉服問屋持丸屋の隱居なり。濱町河岸に別居して、悴

夫婦より優しき氣立の仕送りに、金は斯うして湧くものと、算盤に指入れし事無く浮世を捨賣りにした心なれど、根が好きの道の女狂ひは止められず、内證に貰ふ小遣錢は、大略手切れの金に向けて、茶の湯の座敷は、文売の交ぜ貼り、花は四季折々の眺めを盡して、心變りを花瓶に比べ、櫻と梅棠の艶なる色より、冬さしの水仙花に至るまで、大方は手折らぬ花も無き程なれば、比丘尼の身をも罌粟花に譬へて、頭剃りこぼちたる心の殊勝さよと、うつゝ心になり、玄治店の中宿から口かくれば、此家もお幣の持家とて、直ぐにお冬の侍りけるは、名に聞きしよりは粹なる物としと隱居ドツカと御興を据え、一度が二度と

深嵌りして、近頃は常住こゝに入浸り、後生の事は念頭にもか
けず。

人目を忍びて遊ぶ事に、三味線といふ野暮も入らず、静肅とし
た小酒宴に、如何もお冬を引付けて、地にある中は連理の枝と、
唐土の王様のまつしやつた語を、草双紙から聞き覚えて、戀に
上下の差別無い證據ぢやと、またしても己が田に水を引く算段
ばかり。あア何うしても此家は離れられぬと、はや酔うての口
の呂律廻らぬ舌に、昔時はこれでも揚屋町の評判に上つた聲だ
と、端唄謡うて、お冬の膝を枕になし、その顔惚々に見詰むれ
ば、そのやうに御覽遊ばしますと、戀に寢れて仕舞ひますと、

火影に顔を俯付けて、臉邊を颯と赤くするに、私が庭前の紅梅
も、昨夜の雨に色氣が増したと、態とらしくまた覗き込むを、
あれお止し遊ばしませと、肩を徐に撲てば、隠居は出ぬ咳を二
つ三つして、これ〜其處をさう撲たれては、痘持ちの咳が出
るぞ、私のやうに後に美人、前には灰吹きを置いての色は、興
が褪める事であるが、底がそれ、世を捨てた人どの中ぢや、
何うぞ老人を大切にしてい呉れ、後生になるぞ南無阿彌陀佛と厭
味を云ふを、またそのやうな憎まれ口と、白粉臭い手をもて
蓋、隠居はコロリとしてやられぬ。

お冬が今宵の打扮は、島八丈の小袖に紅絹裏つけたるを着、黒

縹子の巾廣帯を前に結びて、緋縮緬、縮袴を襲ね、白き絹足袋
 を穿きたり、みどりの眉細く、薄化粧して首筋白し、齒は雪を
 欺き、唇は花に擬ひぬ、脊丈は小づくり中肉の美しく、髪は
 全く剃りしにあらで、中薙にして伽羅の油をつけぬ、黒縮緬の
 投頭巾は、床の間の柱にかかり、比丘尼態は部屋の際に投げ出
 しあり、小比丘尼に酌どらして、隠居に杯をさせば、酔うたゞ
 と額を撫で、なほ膝枕の轉た寐を貪るらしき様子に、もう且
 那はち酒を召上らぬ程に、内所へ行って母様にさう云うて來よと
 云はれ、未だ蕾の小比丘尼の、あいと優しく答へて二階を下り
 けり。

中宿もち幣老婆が造れる家なれば、掛け持ちの金儲けに忙がし
 き身の上や。

十一

氷のやうに冴ゆる二十三夜の月を利鎌に見立なば、さらくど
 影に障る枯柳の枝は、髪振亂したる累の怨靈かとも思はれて凄
 し、冬の風の刃物に似て、肌は宛がら截らるゝかど怪しまるゝ
 寒さの中に、ち冬比丘尼は、奥の間に臥し居る隠居の許に、至
 らんものと縁側を行けば、雨戸閉り残したる隙より見ゆる百の
 木影に霜白く置きて、硝子のやうなる夜の色、淋しさに齒の根
 も合はずして、障子明けて部屋に入れば、閃然として人の氣色

も無く、枕元に燦ける香の煙の未だ消えやらで、匂ひの室内に籠るだけ、何となう氣遠くなりて、物凄さに堪えぬは隠居を呼び起さんものと、枕近く立寄れど、不思議や軒の音だに無し、狸寐入して妾を弄ぶかと、初めは拗ねて他人行儀をつくれど、虫の息程の響きもなく、夜は陰々と更け渡りて、白晝には耳に入る事稀なりし鐘の、寂寞たるにつれて鏗々と陰に聞こえ、その音の凍るかど怪しまれて、一入の不氣味を添へぬ。如何に強飲せる疲労の出で来て、寐たるものにもせよ、平生と何うやら變る所ありと、我慢しきれずなりて呼び起せば、返事だに無きに、訝かりつゝも焰暗き行燈の火を、掻き立て引寄せ

て、朦朧とした火影に眠れる顔つくく見れば、思はざりき、息の絶えける儘に眼を活と瞻開き、齒を噛み切めて死し居たり、餘りの事に聲さへ出でず、顔色土の如くなりて夢現ともなく階子を飛び下りれば、勝手にはお幣老婆の寐むげに、煙管を額の杖にして、火鉢の前に居眠るのみ、他の比丘尼はいづれも客ありと覺しくいと、物靜かなる折とて、慾には敏き耳の老婆は直に目を覺し、お冬何うした騒々しいと苦々しき云ひ分に、まア大變で御座います、旦那様は頓死と一聲、恐やと疊に撞と倒れて、殆んど氣絶せしやうなり。

ナニ頓死！とこれも非常に驚きしが、何とかなしけん、恐ろし

とも思はず、座を蹴立て、階子を駆け上り二階の縁側に立てば、影暗き行燈の微に枕元を照らすのみ、直に傍に立寄り見るに卒中症杯にて斃れやしぬらん、引き詰めの苦患に弱りて、兩の掌を握りめめ、五躰は宛ら棒の如くなりて、冷かなること鐵にも似たり、お幣は恐るゝ様子も無く、懷中に手を差入れて、若しも脈などありはせぬかと、鳩尾を試し見る時、ザラリと手に觸れしは黄金、ヤア金子がど異な心地したりしが、俄に後邊を顧みて行燈の火を吹き消しぬ。

闇々たる奥の間に死人の側、一燈消えて星明りだに無きまゝに、悪事は暗處が上首尾と、一旦抜きたる手を再び懷中にさし

込んで、三徳引き出せば、多寡は知れねど、櫻にあらで山吹とは、金子の音にて知られぬ、さりながら入物までも奪ひたらんには露顯の恐れありと考へ、中味のみ援き取らんとすれど、燈火無ければ細工仕悪しと、弗と圓窓に氣がつきて、立廻したる屏風を引くに、薄明りながら、夜更けの月の青く射して、死人の顔を照せば、窪みたる眼の底に光りて、切みしめたる齒の、晒せし如く白う見らるゝに流石の老婆も戦として眼を閉ぢしが、こそぞ心を鬼に持たねば、濡手で粟の金儲けが出来ぬワと、月の光に金子改めんとて、弗と三徳の裏を見るに、古渡り更紗に露草の模様の、哀れげなる中は、取交せて十五六兩の實入あ

り、こは忝けなしと喜び、手早く抜き取りて袂に隠し、骸に夜
 具を引ッ被せ、素知らぬ顔はしなからも、見る人の無りしかど、
 出口から顔少し出して、検むれど、二階は人の氣色もなし、雨戸
 の隙より下座敷を覗けば、枯木の枝を見え透きて、誰とは知ら
 ぬ男女の黑影、手水場の前に立て、叩いたり、叩かれたり、口
 説やら、痴話やらに心奪はれ、此處の出来事は、露しも知らぬ
 らしき様なり。
 お幣は頓て勝手に立戻るに、お冬はなほ疊に打俯して、身動き
 だにせぬば、居眠る下女を呼び覺まし、隠居が家に急報させ、其
 身は穢れたるを淨めんものと、直に神棚に燈明上げて、不淨除

けの祈念と吐せど、不意の仕事に旨ひ顔の憎くらしさ。

十二

頓死の由を直に隠居が家に急報するに、上を下への大混雜、本
 家へ使を馳せて仔細を通ずるあれば、醫師へ駆けつけけるもあ
 り、頓て旦那夫婦隠宅に駆けつけて萬事を管頭の源兵衛に云ひ
 合め、場所柄なれば外聞を憚り、事穩便に所置して、夜の中に
 埒明くやう取計らへよとの指揮に、釣り臺を用意してお幣の家
 に来り、世話料何程かを出して、鷹揚に屍骸を引取りたれば、
 老婆が金子を窺める事などは、鵜の毛程も詮議に及ばず。
 昇ぐ人と昇がるゝ人と、世の中は釣臺に齊しきものと、附添の

源兵衛つくく〜と厭な氣になり、あア金があつても、地面があつても、死ぬなら我が家の疊の上で死にたいものだ、比丘尼屋で頓死して、人知れず昇ぎ出されるなどは、情なき身の上なりとて、老ひの涙を落せり。

餘所の哀れに引かへて、お幣の悦喜は只事ならず、天の與へどはこんな、事を云ふのであらうと、神棚に御燈明捧げ、合掌禮拜して、福德の百年目と吐す、お冬は流石に殊勝にも、厚き愛顧を受けたる人の頓死せしとて、俗名書いて部屋に柱に貼り、追善供養の念佛、日に十度二十度は欠かせし事なし、四十九日も過ぎ、百箇日も経ちけるに、酸いもの好くやうになりて、月

の經を見ざるに驚き、産婆老婆頼みて腹を見せしに、こは懷妊にてはや五月なりといふ、さりとては誰人の胤を宿しけん、折節は變る枕の數々ある中に、一人の眞實を盡したるは彼の隠居なり、年老ひし方様の、諸事妾を勸り勝にし給ひし、情を仇にせまじと、勤氣を離れて、花も實も捧げたる心の、今は却て因果の種となり、賣色の身に大疵をつけたるか、これが若し隠居殿が生前に湧ける事件ならば、あの身代の子實の一人二人、有無も云はずに引取り、乳母に子傳を附けて育て、妾も隠居所の守となりて、戀の外なる世界に遊び、何不自由なく暮らさるべきを、果報は夢と共に失せて、親子共に路頭にも迷はにやなら

ぬ始末、これも浮氣せし天道の呵責なるべし、そは兎も角も愚痴の考へなれど、此事抱主に聞かれなば、驚き呆れ腹立て、如何なる憂目を見んも計られず、妾のみ地獄の板狭みになりて、退くにもひかれず、突き抜るにもぬけられず、え、寧ろ身を捨る血の池もあれかし。案に違はず産婆から懐妊の様子を聞き知りたるお幣は、怒より腹も立てたる顔の、朱を注ぎて夜叉の如く、煙草入を驚嚇みにして、お冬が部屋に來り、轉がるやうにズカ／＼と傍に寄りて、立膝しながら横目でグツと睨みつけ、お冬とゆの字に力を入れて破鐘のやうに怒鳴つけたり、お冬は生ける心地も無く、恐れ入つて手を支けば、返事せぬは膽太し

と、襟首攫みて引き倒し、煙管を振上げて、滅多打、御免なされと詫びる聲を耳にもかけず、え、御免も糞も入るものか、手前は誰れに頼まれて懐妊しをつた、兼々も云ふて置いたぢやないか、勤めの身の疵といふは第一が子を孕むこと、懷中が膨れては人氣が落ち、手持になつては、馴染の客が無くなるわい、奥様上りの手前を斯うして抱へて置くは、並大抵の事ぢやないぞ、百文で買った木の馬なら、好き次第な事もさせて置くが、生物だから飯も喰ふ、それを孕まれては、破れさうな腹を抱へて、座敷が何んで勤まるものか、え、腹が立つ、その腹を踏み蹂つてやりたいと、無理無題の揚句の果は、煙管の管に丁、

々々。朋輩の比丘尼も見るに見かねて、母様御堪解下さしませ、姐さんの身に怪我あつてはと、振り上ぐる手に鉋り付くを、五月細い阿魔奴と拂ひ退け、手前達もこれを見て、浮氣するなと見せしめの滅多打、お冬は息も絶々に、肩で呼吸の苦しげなる様を、ツツと見やりて。これで少たア身に染みたらう、どりや中宿を見廻つて來にヤアなるまい、これ手前達もこの折檻で、目が覺めたらうから、お冬に構はぬえで拭き掃除でもするが、いゝ、怠情ると鐵火箸を喰はせるぞと、急々として一間を出でける。

十三

お冬は臨月の末より中宿に出でずして、今漸う産の紐は解きたれども、泣く兒を抱きて、これが其方の父様ぢやと突きつける、男も無き身の、母はありながら、生れ落て孤兒のやうなる不仕合よと、巢の中に嬰兒を愛して、搗き立ての餅のやうな頬を舐り、涙を産衣の袖に注ぐも、零落れてよりの哀ればこれにて思ひあたりたり。世の中には金もあり家も饒にして、諸事物足らぬものゝ無き中にも、子や孫の設け難くて、神に祈り佛に念じ、諸所の名湯にも入浴させて、夫婦の間を和らぐれども、なほ獲ることならぬが多きに、妾は如何なる因果ぞや、前には他家の後妻となりて、米の價を忘るゝまでの果報に暮らし、擧げたる

子の袴着も見えしと樂しみしに、惜むものは失せ易く、盈たる月の虧けて、愛を無常の風に割かれてよりは、幸無き事のみ重なり、斯かる身になりての今に無くても濟むべき子の生れ來て、母に愛目を見すのみならず、その行末だも覺束無き境界に陥りたるは、過去の罪の深きが繋がる親子の縁か、あア妾さへも生甲斐の無き此頃には、所詮この子の満足に育つべき様はなし、惣じ愛嬌つきで、腦天てんくなど覺えし上に、抱主より赤ン坊ありては勤が疎略になるなど云はれ、名も知れぬ人に賣らるゝか、里子になど遣らるゝよりは、寧ろ孩兒の中に、病まず痛まず、虫氣も無く、肝の氣もなく、なるならば眠る如く造作な

く死んで呉れなば、この子も果報で妾も愛目を見ずに濟むなり、その上再び娑婆に出る折には、三世相にある前生を能くく見抜きて、油三合盗みたる罪あり杯ど、書いて無き人の腹に宿り、公方様の御簾中にでも生れ出で、今日の不運を取戻せかじと、我身の辛らきに引較べて、子の行末を氣支ひ、泣いて送る日の長さよ。

秋の日の暮れたるに、影暗き行燈を友として、お冬は獨り行末の事のみ考へ續け居けるが、思へば思ふ程、味氣無く住み詫ぶる事のうたてく、苦勞に胸の清々する日とて無ければ、血の道定まらず、肥立ち悪くして、二十一日を過ぐれども、未だ巢を

出づるに及ばず、そののみか乳さへ細くなりて、見はたれ餓えに泣くのみなれば、お幣老婆は一入眉を擡め齒を切みて、どもすれば怒鳴り立んずる見幕に、お冬は心も心ならず、今宵も語らふべき友の無きまゝ、一人部屋に引籠りて、勝手の方のドヤ／＼と騒がしき音など聞き居けるが、お幣は今しも中宿より歸れりと覺しく、召仕ふ者を叱り散らす聲の鋭く耳に入りて、眠らんとすれど得ず、暫時してどろ／＼と眼を合すれば、恐ろしき夢に魅はれ、覺めて動氣の激しきを知りぬ。
 お幣の聲は間近くなりて、隣室に比丘尼を叱る様子、手にとるやうに聞えぬ、その誰なるやは知れぬと、思ふに客を疎略に

したる罪などあるか、老婆が怒り吼ゆる聲も高く。手前も病氣にでもなつて、寝んで居たいのか、一人煩つて居るものがある。と何れもこれも真似をしたがる、え、馬鹿め、お客を疎略にして商賣が立つと思ふかと、我獨り饒舌散らして、言譯する辭を少ども耳に入れず、お冬は妾に當摩りの折檻を、試し斬にさるゝ程辛らく思へど、病んで稼業を勤めざれば、小言も無理ならずと我慢し、強ひて眠れど、さてしかすがに眼は合はず夜は更けたり、朋輩はいづれも中宿に行きしと見えて、人の聲だに聞えず、お冬は寐られぬ儘に、抱ける嬰兒を眺むるに、スヤ／＼と眠りて、罪の無い口元目に妾のみ、宵たりと他人の云ふも

無理ならずと、可愛らしさに頬に口あてし、淋しきが中の興を
 覺えけるに、兒は夢に驚きてか、呱呱として泣き出せば、寐ん
 ね子よと囁して、乳房を竊と含ませけり。
 斯くしてまた四五日を過ぎけるに、お冬が産後の肥立ますく
 悪しければ、到底も存命難しとの覺悟しほらしく、亡後の事な
 ど夫と朋輩の誰彼に頼み、唱名靜に死を待てば、翌日の夕暮、
 病症頓に一變しけり、枕元に附添ふ女の醫者呼ばんかど云ふ
 に、お幣老婆は眉根を寄けて、死病に藥が利くものかと、臨終
 の苦患を煙草喫かして見て居る人鬼。お冬はその夜の五つ頃、
 諸佛菩薩の來迎に、蓮の花は散りぬ、さりどては菊の未だ籬に

咲ける頃なるに。

十四

作りかけたる雪達摩に、眼睛の炭を加へずして、群童夕の鴉と
 共に散り、降るやこんくと囁し立てたる雪の、暮六つ前に歛
 りて、入る日の影赤く百の梢を照しぬ。風吹き出でしは、雲を
 掻き拂ひたる空の、銀色滴るばかりに凝りて、月の出際の面
 白さ。庭の松の白きもの揺り落す様を、市女笠被ぶれる常盤に
 見立つれば、これや芝居でする關の戸のくもり戸は、鎖せる儘
 に綿を懸けたり、本町持丸屋の主人は、店を手代共に仕舞はせ
 て、其身は管頭の源兵衛を相手に、利に暇無き眼を今宵は庭の

雪見と洒落て、これはまた算盤の外の世界と、内儀が手料理を
 下物となし、あれ御覽遊ばしませと、娘が縁側の障子を開くる
 を機会に、首をヌツと伸して眺むれば、廣からぬ庭ながら、天
 地は一色、お手の物の濱縮緬を一面に敷きたる如く、在來の石
 燈籠に四つ目垣の裙模様を見せ、月の石餅の紋所を染め抜きて、
 水色に瀟洒とした鹽梅を、振袖地に染めて賣り出したらば、無
 ぞ流行ることなるべしと、造次轉沛も商賣氣を離れぬ話を、源
 兵衛手を拍て調子を合せ、これは面白き御趣向で御座ります、
 來年の花見を當込んで、早速千反ばかり鴨河に詠へ申すべしと
 云ふを、來年の事を云ふと鬼が笑ふと主人は古い洒落を持ち出

せば、その鬼の笑ふ正月も、もう隣家合せになりましたと湧か
 す處へ、内儀は手製の肴持出で、源兵衛これ喰べて見よと自
 慢氣の云ひ振、へい、これは何れもこれも結構づくし、三谷
 の會席を頂くよりもお旨う御座ります、お嬢様手前共にまでお
 酌は恐り入ります、さう私ばかり頂きますと、泥酔ひましては
 不調法で御座りますと云へば、主人は福々しき微笑を傾け、源
 兵衛！へいと畏れば、お前が八百膳へ行つたのは、何日ぞや親
 父さんのお供して参つた時ばかりかえ、へい、あの折きりで御
 座りますが、今以て忘れはいたしません、ホソに御隠居様のお
 隠れ遊ばしてから、もう一年足らずで御座りますが、この雪を

斯ふして旦那と御一所に眺めて居りますところを、御覽に入れたいものですなと、律義一遍の御譜代、前垂懸けにて酒宴に侍る男とて、雪見の席にも氣のめいる話するを、主人はそれを止めさせけり。

折から門の外に嬰兒の泣き聲すれば、主人も源兵衛も耳傾けて聞くに、正しく我家の廂下に足を止めたるか、その聲は一つ處にありながら、冬の夜の遠く澄み渡りて聞えぬ。

夜に入りたれば子傳の泣く兒を賺す者も無かるべければ、必定飢えし乞丐などの行暮れて、土藏の廂を今宵の主人と頼むにやあらん、雪の夜の親子共寒さに凍えてあらんに、残り飯などあ

らば、取して善根を蒔けよと主人の云ふを、下女畏りて、さらば見届けて参りませうと、門の戸細目に開けて覗けば、五十路に餘れる老婆の、泣く兒を賺して子傳唄謠ひつゝ、木屐の吾呂太を天水桶の臺石に叩きつけて、店の構造に眼を注ぐるを、何ぞ御用と咎むるに、はい少々用事が御座いますして、直々に旦那様にお目にかゝりたし、妾の名は烏屋の老婆と仰せあれば、管頭さんの源兵衛どのもち馴染の顔ぢやといふ、さうした御用ならばお遣入りなされませと、勝手口に案内すれば、手代共見つけて、それは誰かと詰り問ひぬ。

旦那と源兵衛の食事濟ませし處へ、斯くと告ぐれば、何用あり

として不思議に思ひたれど、いづれ御隠居様の瘡が残つて居りま
 したか知れませぬと、源兵衛旦那に代りて挨拶に出でけり。
 旦那が直に逢ふ筈なれども、朝來の寒さに、お風邪召せしとて、
 臥せり居給へば我代りて出でたり、何なりと主人通りに仰せあ
 るべしといふ、左様ならば申上げますが、實は貴君様も御存じ
 の筈の何日ぞや、御隠居様 妾宅にてお隠れ遊ばせし折も、お
 枕に待りたる冬と申す比丘尼の、その以前から御情を蒙りたる
 印の現れて、先頃安々と女の兒を産み落しましたが、御案内の
 通りの 妾共の境界は、色を賣る身の誰の持物とも知れぬのが
 花なりしに此方様の御隠居様のお胤を宿して、子までも生みし

以上は、もう賣物にならぬ焼きつぎ茶碗なり、さればとて母親
 までもお引取下さいますと申しては、無理難題にも聞ゆべけれ
 ばせめては 妾共には邪摩ものゝこの兒をお育で下され間敷や
 と、藪から棒の唐突に、源兵衛は呆然たりしが、そは我が一存
 にて御返事に及びかねれば、暫時お待下さるべしとお幣を残し
 て旦那の居間に至りぬ。
 其あつて源兵衛は立出で來り、先づ煙草二三服喫つて氣を落付
 け、只今旦那とも相談いたせしが、それは此方には一向存せぬ
 次第、勿論お賣り物の花なれば、種子はいろ／＼あるべきを、
 我等方へお持込みありしは、何か證據あつてかと詰れば、證據

は家に秘め置きたり、御用とならば何時にても見すべしといふ
 を、源兵衛は冷笑つて、まこと證據があるならば、何ぞて有無
 を申すべき、此方は何處までも穩便の沙汰をこそ願へば、その
 子は御隠居の遺物として引取り、母親をも呼び寄せて、有髪の
 尼の行爲ある女子ならば、菩提所の邊近くへ宅を造つてやり、
 先代の墓に香花を手向くる役目をも頼むべし、との旨母御へも
 傳へて、篤と安心なさしめ給へ、持丸屋重兵衛は他人の子弟を
 多く養ひて、立派なる商人に仕立て、暖簾を分ち家を興へて、
 何不足無く暮らさして遣るのが家法、それを何ぞや、その一人
 の見がいよいよ御隠居の胤なりと筋道の判る以上は、好んでも

育て上げるなりと、鷹揚に云はれて、お幣は返す辭も無く、去
 らば證據を持參して、この見をお渡し申すべし、それまでは老
 婆が預り置きますと、時宜して立たんとすれば、御足勞をかけ
 たれば、これを御謝儀に差上げよとの旦那の寸志と、手代が一
 間より持出づるを、源兵衛は受けてお幣に與ふれば、少とにて
 も取つたが利得と、懷中に受收め、眠れる嬰兒を揺ぶりて、態
 と門口より泣き出させ。もう可哀さうに、もう乳が呑みたかろ、
 寐んぬ見ようと云ひ續け、開けたる扇を鎖さずして遁ぐるが如
 く立出でける。

傳へ聞く天竺の鬼子母神が、未だ佛になり給はぬ前は、千人の子を持つて、養育の道に窮し給ひしよりの出来心か、他人の愛見を捕噬ふては、我が子の餌食に充て給へば、諸人嘆き悲みて、釋迦如來に濟度を頼みけるに、如來乃ち方便を以て千人中の末の兒を法衣の袖に隠されければ、母神は愛に眩みて、惱亂、大惱亂、相好夜叉の如く變じ、迷ひ惑ひて、その行衛を搜し給ふ折ふし、如來の宣ふは御身千人の子を持ながら、唯末子一人盜まれしとて、そのやうに悲嘆し給ふを、世には親一人子一人の、蝶よ花よと育てたる娘を、無殘や御身に捕噬はれたらんには、その嘆きの程も思ひやられるれ、今日よりは前日の悪業を止め、

我が弟子となりて、善に歸依し給ふに於ては、尋ぬる末の兒を眼前に出すべしと、法衣の袖をうち拂ひ給へば、愛らしき兒の莞爾と笑ふ優しさに羈され、それより徳を積み善を勤め給ふ程に、順て鬼子母神と祀られ、泣く兒を守りの本尊となり給ひけり。
 お幣老婆も怨といふものに眼眩みて、慈悲愛憐の念は露しもなく、たゞ金を溜めたしとの心の増長して、百の悪行、不徳の所爲の數あれども、世に財寶に若くもの無しと思ふにぞ、良心早くも迷ひの雲に隠れて、畜生にも劣れる心のみ只走り走りて、狂へる駒の止場無きが如し、されども本心の美は、何日し

か現はれ来るべき時機の無きにはあらざるべきも、今はたゞ泥の雨を降らし、腥き風の吹きて、花の美、月の艶なるを見る折の無き、胸中の魔塵こそ是非なけれ。

丸持屋を立出で、二歩三步あゆみ行きけるが、何うしてもこの見が稼業に邪魔なるを思へば、路傍に棄てもしたき心なれど、虫介と違ひて生ある人間を、狗猫の餌にするやうな無慈悲な事もなし難しと我慢し、また半町程歩みしが、いや／＼母親無ければ乳も乏しきに、妾も稼業に忙しうては、貰ひ乳にのみ奔り走きもならず、ツマリは飢えて死ぬ迄のこの子の、妾の懷中にありて、髪目を見するよりは、寧ろ持丸屋の檐下に棄て、主

人夫婦に拾はれなば、命は兎も角も助かるべしと、引返して足を止め、襤褸に嬰兒を包みて、檐下に竊と棄てしが、見は斯くとも知らずで熟睡する顔の、折しも廂を迂る月影に見れば、罪も無げなる愛らしさ、花を見て美しくしからずと云ふものあるべき、お幣は何日に無き哀れを催して俄に棄つる氣の失せ、また抱きかかめて、懷中に温めつゝ、えゝ氣を揉まするゝとその顔を覗き込めば、色の白きは雪を欺くめり。

行くともなく歩むともなく、兎角して親父橋の袂に來りぬ、明月は巷に置く雪を點らして、明るきこと白晝の如く、夜は大分更けしと覺しくて、往來はいと絶々になりぬ。おでん賣の氷ざ

くくど碎きて、下町へ曲る風情の静けき、宿なし犬の月夜を
 追ふて、のそくと食を求る様を、お幣はつくくと見詰め居
 たるが、頓と橋の上に来りて、弗とまた嬰兒の身の上を考へ出
 し、え、儘よ、一思ひにこの橋の上からと、桁に片足踏みかけ
 て、懐中の見を半ば出し、吐嗟投げ返まんとして、月影に顔を
 見れば、見は夢を破られてや、哀れけに泣く聲の雪に澄みて、
 そいろにまた惻隱の念を起さしむ、棄てんとしては棄てかね、
 投げんとしては投げかねて、お幣は有耶無耶に胸の鎖されしが、
 見るとも無しに兒の顔を瞻詰むるに、髪の色艶ありて黒き、
 眼の美しくして愛の溢るゝ、流石に名残の惜まるゝ儘、また懐

中にさし入れて。おう、可哀さうに風邪を感くな、もう婆は恐
 い事はせぬから、泣いて呉れるな、早く歸つて貰ひ乳してやり
 ませうと、賺しつ愛しつ歩を移して、また思ひ出せる事あるに
 や。おう忘れて居た、先刻持丸屋から貰つたお金はと、袂から
 取出して、中うち檢むれば、思ひもかけず十兩包み、こは有難
 しと押戴き、嬰兒の頬を舐めて見て、これもお前があるからの
 お庇蔭だ、鶏の子も雌鳥は卵を産むが、お前も成長して、ドン
 とお金を儲けさして呉と、俄に心變りして、子を愛しながら家
 に歸りぬ。

世の浮た稼業する者の形態を見に毛色よき猫を飼て、膝の上に載せ、尿もさしてやり、鯉飯をも拵へて與へ湯を遣はせ、抱いて寝る程の慈悲はありながら、抱えの赤襟には強情あたりて、三味線の撥を喰はせ、長煙管の管を試みて、小鬘の蔭に疵を負はせ、悔悟の色も見せで、玉やくと畜生のみを愛するは、實にもうたてき心ならずや。

お幣も宿無し犬に餘れる飯を與し事あり、冬の雀に干飯を啄まれて、腹を立てざりし慈愛はありながら、我が召仕奉公人には仇同士の間らしくして、どもすれば呵責の鬼と我からなり、管を振ふ事の日毎なりしが、如何しけん、一旦嬰兒が微妙の艶

態に、人外の魔心を奪はれ、飢ゑさせ殺すべきの悪念を忘却して、愛にひかされ、慾に繋かれ、邪見漸う薄らぐにつれ、柳は緑に花は紅の色面白く、喜怒哀苦愛惡慾の七情は、人間並に備はりあれば、何時しか本心の美に歩を移して、今は稍々邪念の雲の脚を、風が拂はんとする時なりけり。

腹の立つ日も、心無き嬰兒の顔は唯にやくと優しく、物悲しき時に見るも、笑ふ唇の愛らしさ。飢れば泣き物足れば眠る、斯かる罪なき者を、萬物の靈たる人の、如何で憎しと思ふ所以やはある、お幣も暇ある折には、子傅唄を唸りて、治郎どんの犬と太郎どんの犬がど、囃し立て、愛す程に、他人よりは多く

懐きて、顔見れば笑ふものに極り居たり。
 物じて人は敵意あるものなり、窮鼠の猫を噛むは、其身を護ら
 んど欲してなり、猛き狗の人を吠ゆるも、己に恐るゝ所あれば
 なるべし。昔しく唐土に虎のありける、或時いたく飢えけれ
 ば、里に出で、嬰兒を掠め、深山に入りて、松青く水白き境に
 至り一口に噬はんとするに、嬰兒に敵意なく、無心無爲に平沙
 の上に在りて、莞爾と打笑めるのみなれば、流石の猛虎も美と
 愛とに慈心を忘れ、尾を振り足を揚げて、舞ひつ踊りつ、その
 兒を愛撫したりとかや、斯かる例は世にあり勝の事にして、お
 幣の赤兒を慰むも、虎の心になりたるなるべし。

夜を稼業の比丘尼屋は、白晝は錦の裏座敷、冬瓜船の入江の様、
 寝轉んで草双紙見る者あれば、湯上り姿を鏡立て、化粧に餘
 念無きもあり、中には阿彌陀籤を出して、餅菓子買うて楽しむ
 あれば、各々馴染の噂して、誰が斯だの、彼アだのと、べちや
 くちやと姦しく百の噂り、客の方でも今頃はと火鉢に凭れ、噓
 をして、畜生噂をして居やがるなど、丹次郎になりたがる黄昏
 前は、勤めする身の極樂世界なり。
 お幣老婆は勝手から出来り、抱いた兒を疊に下し。お前方も少
 ど、此の可愛らしい赤ン坊でも愛して、寝氣を覺さねえかよ、
 この可愛らしい兒をよと、年嵩の比丘尼に渡せば。おう好い兒

だ、笑つてお見よ、皆さんこれ御覽なさい、お母さんのお世話
 が行届いて居るので、お乳が不足しても、この肥太つて居こと、
 これ君ちゃん、可笑しいか、おう好い見だど、撫でつ按りつ可
 愛がり、妾にもくと争ふて愛せば、見はたゞ莞爾と打笑みて、
 神の如きぞ尊けれ、臥したるは起き、眠りたるも眼を覺し、皆
 一同に抱兒を愛せば、平生には笑顔見せし事無き、お幣の興あ
 り氣に見惚れて。それくさう無理に引張つては、赤ん見の手
 が抜けるワ、いか、皆さん、怪我させぬやうにして、遊ばし
 て置いて呉れど、今日のみは笑つて出で行きぬ。

おう悪かつた、このやうに可愛らしいお前を、最初に殺さうと
 した妾の心は、今から見ると鬼か蛇か、お泣きでない、これを
 見よ、でんく太鼓に笙の笛不倒翁に犬張子と囃子立て、は、
 お幣ころりと添寝し、むづがる時は夜もすがら賺して、己が肌
 にあたゝめければ、見もまた如何で、懐かざる事のあるべき、
 手を拍て呼べば、這ふて膝に縋り、舌を出して愛せば、笑はず
 といふことなし。

雪の日の寒き、雨の夜の淋しげなるも厭はで、乳ある家を頼ん
 ては、貰ひ乳に行き、この見一刻も早く成長せよと、老いの身
 も忘れて、養ひ育つるも、美き花咲く日を見んための、植木屋

の苦心ぞかし。

隣家の庭の牽牛花の蔓は、板垣越に手を伸して、お幣が家の縁側の釣り手桶にからみつぎ、今朝見れば紺青色の花、咲くと見る間に二三輪、紅筆の鞘を破つて開けるも、未だ七輪に火さへ置かぬ前の事なり、隣家は近頃引越し來りし商人躰の夫婦者にて、嬰兒を失ひけるにや、漏る乳の遣り場に困り勿躰無い椽先へ捨てるのを親しく見たるお幣、此方は無ふて難儀する折なれば、頼まば捨てる乳を、此方へ貰ひ受ける事の成り難くもあるまじと、物干竿の隣家の庭に突き出でたる詫事より、お交親になり初め、乳の不足なる由を云へば、何うせ捨てる乳の、此方

様のお役に立つことならば、出る丈は差上申すべし、そのお子さんを今からお遣しなされませと、世間に鬼ばかりならぬ心切に、お幣もいたく喜びて、一日に幾度となく、貰ひ乳して、お君の日に／＼肥え太るを見て喜びけり。

夏の雨の痕無く霽れて、横雲に夕陽のかゝるも、涼しく、猫の額とも見る中庭は、撒水したゝかに打て、車の乾かぬにも清く冷たき思ひせられて、金魚に麩を遣れば、青々した藻を出で、水の面に躍るも美しく。御免下さいませと、お幣の家の格子戸を開て入る女性の年は、三十二三とも見ゆる年増の、小意氣なる風俗したるなり。はい、何人様かと立出で、簀戸を開くる

下女のお三、これはお隣家のお内室さん、サアお上り遊ばしませ、今日は大分お涼しう御座いますと云へば、左様で御座います、アノお嬢さんはお目覚めで御座いますかと問ふ處へ、裏口より駆け來れるお幣、團扇の風に勝手元の座を掃ひて。サアお寄り遊ばしませ、嬢も恰度能く只今眼を覺しましたところ、御心切に甘へまして、そんなら一杯頂戴いたしませうかと、風通し好き次の間へ寐かし置きたるお君を抱き來り。サアお乳を上げるぞと、内儀の手に渡せば、おうお重くおなり遊ばしましたこと、ドリヤお乳を差上げませうと、懷中して乳房を含ませれば、飢ゑてや吸ふ音微に聞えぬ。

嬰兒に乳を吸はせながら、内儀はお幣に問はるゝまゝに、身の上話をするを聞けば、この夫婦の本町の藥種問屋武藏屋に奉公中、今の夫と人知れず、戀をして、水洩らさぬ迄の色濃きを、旦那様始め番頭の喜七殿の耳に入り、掟に據らばお暇にもなるべき所を、粹な取扱ひの御媒妁にて、夫婦となりて茲に世帯を持ち、夫は相も變らず旦那様に通ひ奉公して、事無く暮らし居しが、如何せしか奉公中に孕みし見は、満足に生れ出でたれども、虫氣にて相果て、洩る乳を貴女様方へ差上げますも、何かの御縁で御座いませうと云ふをお幣は聞取りて。さうで御座いますかと、女性の顔をシツと瞰上たり。

十八

花に明け紅葉に暮れて、お君ははや五歳の春とはなりぬ、男兒
 ならば髪置の祝ひして、氏神様に宮詣りし、紙刀買ふて貫ふて、
 喜ぶ顔の勇ましげなるを、此方は女の兒の事とて、蝶々鬘結は
 して、猩々緋の帯を御殿結になし、目も清しげなる紺青色の振
 袖に、鬱金縮緬の帯楊させて、これ見よがしに社參の日の美く
 しさ、見る人に鳥が鶴を育てしと、噂さるゝを結句鼻を蠢かし
 ぬ。

本來の珠玉を磨き立てし、また一入の光澤を添ひけり、お幣は
 お君を飾り立てし、雛様のやうになし置くは、俗に云ふ賣物に

花とはこれや、斯る稼業する家に、男の子は役に立たずなれど、
 容形好き女の兒ならば、諸白屋の看板は杉の葉を立て置く如く、
 これが呼物になりて、自然と客足の着くものぞかし。

されども未だ頭は無き五歳の子の、斯かる人中に育ちながら悪
 拗もせず、まことに優らしき性質なりしかば、一入諸人の氣に
 入りて、此の家に常住入浸りにする客などは、お君を座敷に呼
 びて、菓子と與へ、物を呉れて、家内の氣に入らんと力むるも
 ありけり。

比丘尼等もお君を座敷に連れ行きては、これ見よがしに客に會
 して、それ誰の子ぢやと問はるれば、おう無情き人かな、これ

は貴君のお情けゆゑに出来し嬰兒なり、それをお忘れなさいましたかと、座輿を添ゆる道具となりて、幫間末社に優る快樂もありき。

なるならばこの親交を押繪にして、一枚羽子板にさし向ひに、貼つて見たき程のお君が親友あり、容貌の肖たる瓜二つとは、斯かる者をこそ云ふべけれ、年數も三つばかり上なれば、誰か目にも兄妹と見ゆべし、これは此頃お君が家の隣に住む、本町武藏屋に通ふ手代の許へ、日毎のやうに乳母と子傳が連れて來る若様の幸次郎なり、若様退屈し給ふ折は何日も乳母、子傳、女房などが總出にて、新道の狹き露路を、鬼子して遊ぶにぞ、

お君も共に愛されて、坊ッ様、嬢さんと一所に呼ばれき。

坊ッ様が躑躅の下に遊ぶ時は、花を撈りてお君に與ふるに、紅葉のやうな手を出して貰ふしほらしさ、或日お君は坊ッ様の相伴に晝餐に呼ばれて、隣家の家にありけるが、一方は大家の若様の、乳母や子傳に冊かれある事ゆゑ、座を離れては危険う御座いますと、後邊から帶を抑ゆれど、お君は野中のばら／＼松、構ひ人も無き折からとて、椽側にころ／＼と伏轉びて、起きも得やらず、泣き叫び居るを、坊ッ様は走り行きて、抱き起しつ。きいちやん、痛かアないよ、おだまり、泣いちや厭やよ、サア一所に飯を食へませうと大人しく食事をなしぬ。

折から庭の戸を開けて入り来りしは、お幣老婆、六十近き年數に
 腰も曲らず、なほ赤ら顔の艶々しく、今日は餘所行きと覺しく
 て晴衣を着たり。お天氣様で好う御座います、毎度子供が上り
 まして、御厄介に相成りますと云へば、女房は臺所口から飛ん
 で出で、前掛に濡手を拭ひながら、襷を除らんとするを、その
 儘くど押し止め。まア決してお構ひ下さいませぬ、直ぐ歸りま
 すから、實は淺草まで一寸參らうと思ひますが、子供にさう云
 つて行かないと、また留守に泣かれると仕様がありませんから
 と、お君の顔を見れば。母アさん妾も一所にと背中へ手をかく
 るを。えい、今日は遠方だから行かれない、お前は家に残つて

坊ッ様と一所にお遊び、直ぐ戻つて来ますと云へど、泣きつ嘘啼
 つ跡追ひして背かざれば、手を引いて行かんとするに、幸次郎
 は興無氣の顔して。乳母ヤア、私も淺草に行きたいと、云はる
 程の可愛さよ。

十九

美人も差出がましく、椽頬に立出で、高慢に歌詠まんよりは、
 几帳の蔭に隠れて、庭の櫻の溢るゝを眺め、妻琴靜に搔撫で居
 るこそ一入の趣を添ふめれ。女子はよろづにつけて、優しく蓮
 葉ならぬを、志の美しく見らるゝものなるに、濁江に生ひ茂
 る草の、風情なきは哀れとや云ふべき、されどもお君は誰が心

をや遺傳けん、斯かるうたてき稼業する中には稀に、月影の澄めるに齊しく、物ごし優しく鷹揚にして、大家に成長ぬる姫御前の如し、姿の艶なるは寒紅梅の雪に匂ふかと思はれ、容形的美くしきは、李花の雨に惱むにも似たり、さなきだに嬋妍たる上に、朝夕の摺り磨きは、お幣が指揮の軍法にも勝りて厳しく、琴、三味線に精出さして、行末は玉の輿にも載せたき老婆の所思を、お君は敏く悟りながらも、心から底から養母に懐きて。母アさんくと、實子のやうに、慕ひ廻るしほらしさに、鹿も角を折りて、春日の野邊に、蕨を見に摘んでやるべし。去るもの日々に疎がらば、來る者の漸うに密かる道理とて、人

は盛るに聚り、零落しては親しき友も離るゝなり、佐野川市藏も今は年波の寄るにつれて、娘共を振向かしたる標致も衰ひ、人氣は容色の枯るゝと共に退きて、藝人の果の哀れなるは、譬ふるに紫陽花の色褪めては、園の中に根を残し置くさへ、厭氣なるが如し。引きかへて以前が召仕へのお幣は、月毎毎に繁昌して、今は葭町に烏屋といへば、誰知らぬ者も無く、比丘尼屋陰間屋を開ける傍、高利の金をさへ貸付けて、いと有福なる身の上となりたり。

これが若し骨ある男ならんには、訪はれた義理の顔ならねど、

根が海月にも劣りたる女形の、後家や妾にまで儘にされたる野郎とて、恥知らぬお面の千枚張りに、今日は薄化粧の澁を塗りて、面皮のみをグツと厚くし、夕刻よりお幣の家を訪ひけり。思ひがけなき親方のお出でと、下にも置かぬ待遇に、市藏却て赤面して、座にも居辛き心地。これ見て下され、彼を御覽遊ばしませと、云ものは皆自慢の店卸し、酒も茶屋で飲む程には旨からず、肴も二十一しながら箸つくるに比べて、味いと淺かりき。中庭を距て、彼方の一間には、音色床しき河東節を唄ふお君、聲ほがらかに張上て、糸の調子に合の手や唄「く〜り枕のあいおひも、まつとはしらぬ君ゆゑに、枕一つでよいものを、

残るひとつのおもかげは、蚊帳のおさへとなりけり』と唄ひ納めて撥を捨る風情を、流石の市藏惚々して、堪えられずと一間を覗けば、葉越に簾の涼しき蔭の、見臺に對ひて、一人興ありげに温習居る娘の姿の美しくさ、この別嬪をお幣は如何にして手に入れけるにやと、眉を擡めけり。親方さん、今日は何よりの御馳走に、娘の河東節をお聞かせ申ませう、ツイ未だ何方様にもお聴きに入れないのですが、口開をさせますから、節の悪い所や、癖などがありませんたら、何うかお直しくださいませとお君を呼べば、母アさん何御用と縁側を辿り来て、市藏の前に手を支き辭儀するは、まこと眼の覺む

程の標致なり。

これはお前さんの縁者かと聞けば。あれ親方さん、妾には縁者は御座ませぬ、この兒は仔細あつて妾の養女、名は君と申す、何分御世話を下さいますと云ひ、驚いたかと云はぬばかりの顔色しけり。

おう、好い女だ、標致美しだ、さし向き藝者といふ寸法だな、何にしてもこの女があつては、母アさんは左團扇だ、ちと私もその風にあやかりたいものぢやと笑へば、お幣も喜びて。お君親方さんにお前の河東節といふのを聞かせ申せ、これ、厭ではないよ、ナニ氣支な事はありませんアハハハハ。

二十

初三の月の圓かれと願ひしは、昨日今日と思ひ居たるに、お君今は十八歳の春に遇ひ、薄雲の邪魔だに無くて、窈窕たる姿は一入の艶麗をぞ増しぬ。斯くてお幣の慾心の全く失せしといふにあらねば死灰再び燃えて、頻りにお君に戀情の起らんことを患ひ、かの石女の妬を醸し、忽ち愛想をやぶりて養育したる丹誠に慢じ、得知らぬものゝ妻とせんよりは、妓女ともなして、老後の樂みを取らんものと、遊藝に堪能なるを機とし、藝妓とはなしけり、賣り出のそもくより淺からぬ馴染を重ねたるは、筒井來振分髪の折柄より、友垣なりし若旦那幸次郎にぞある、

年も漸う二十二三、品の好き顔色に、大家の子息株の高等なる所ありて、凜たる男振は氣象のある羽織の遁さぬ若武者なるべし。

根が互に知り合ふて、呼びつ呼ばれつする中の馴染も早く、割つて見せたる心意氣の、胡椒程利いたと見えて、ピンと辛くて涙ぐむまでの濃い色を、人は知らねば、流石の烏屋が娘とて、男嫌ひとは面白しと、焦れ寄る浮れ男の三人四人は、眼の中にころりとさせて、さて座敷へ出て音べを合すれば、五人十人戀の病になるといふ程の面白さ、和蘭の藥の價が狂ふたのも、お君に焦れて床に就く男の殖えし爲なりとは、テモ仰山な噂ならずや』

君もこぬかの雨降りて、暮れ行く春の縁類に、お君は未ださ、やかなる青梅の實を眺めやりつゝ、開け放ちたる障子に凭れ、島田鬘を襟に埋めて、膝の上に疊み鶴の、羽を伸して見ては吹き飛ばし、餘念も無氣に樂しみ居る處へ、格子戸をさらりと開けて入来るは、小紋の羽織着たる男にて、流行の本田を伊達に結ひたり。

おや太夫さん、お早々と宜うおらつしやいました、サア此方へお這入り遊ばしませと云ば、佐野川市藏は手をもて制し。何うぞ構つて下さるな、今日は少と意氣筋の御使者に参りやした。あれまたお申戯遊ばします、と何處やら嬉しそうな顔を、市藏

は下から覗いて見て、何うも早い、天眼通ぢや、云はぬ先から悟られて、袖ない事のねだり言、煙草の火さへあれば結構、底で姐さん今日は安くないお役目にと、櫻張りの銀煙管を脂下に啣へて、身を反らしたる様子は、舞臺で見るとは一入なり。市藏は鼻紙袋から紙を取出して、出もせぬ鼻を拭ひ了り、姐さん、餘りお前は罪ぢやアねえか、旦那が何のやうに御心配なさるか知れやしねえぜ、烏の啼かぬ日はありとも、お前の噂の出ぬ日は無い、少とは優しくあしらつて、氣に入るやうにやつて下せえ、私も何から何まで世話になつて居て、お前と旦那の中を好くでもしなきア、御恩を送る立場が無いと。浮氣な中にも

一筋に達引く肌は、江戸の名物なり。お君は何うやら憂ひ顔して。妾ぢやとて、旦那の肚が吐み込めぬ程では無いけれど、何を云ふにも母さんはアノ通り、未遂げられぬ縁ならば、今の中に思ひ断りましよ、アノ誰やらが詞にも、人と契らばうすくちぎりて、未とげよ、もみち葉を見よ、薄きはちそく、濃きはとく散るものとありましたとツンと拗ねてさし俯向けば、市藏は手を拍て賞め。よう云はれた、それこそ旦那の迷ふのも無理はない、世の中は色一筋を買ふもの多くて、意を喜ぶ者はない、旦那に知らして喜ばしよ、厭でも例日の處へ来てと云ふに、お君も微笑て。あれ厭やでもとは口の

悪い、御邪魔でも参りますと傳へて下さいと云へば市藏は笑ひ
 轉げ。際どい處でお惚氣か、姐さん此方をお向き、それ、その
 片類に嬉しいと書いてあると、歸り行くを見送るも嬉し涙。

二十一

兎角は噂の立ち易き涼み臺を、逢ふ時はかりの戀の置所にして、
 果敢なくも打語らふは幸次郎とお君なりき。もし若旦那様と怨
 めし氣に云ふを、聞かぬ振の幸次郎は、煙草に返辭を紛らして。
 何んぢや、さう五月蠅云はれても、天神さんぢやあるまいし、
 何も彼も自在に埒が明くものか、第一老婆が難物なれば、所詮
 私の手には合ふまい、底で親方を頼むとしても、金子で濟こと

なら、老婆がうんと云つて食傷する程、アノ顔へ叩きつけてや
 るけれど、黄金では承知はせまひがと、凋るゝをまた立直す涙
 の露、さ、さ、黄金で承知をしまいと、何處を押しての仰しやり
 やう、未だ云ふても見ぬ中から、出来ないものと諦めて、妾を
 野に置く御所存は、遠から見抜いて居りましたと、袖を噛みつ
 く怨じたり。

私も本町の武藏屋、親がりの身ではなし、男の意地なら有る
 だけの、身代を鞆にかけて溶解しても、思ふだけの一心は徹し
 て見せる積りだが、遊女とは違ふて其方は、母御が得心せぬも
 のなら、金の轡を喰するとも、儘にならない身ぢやないか、固

よりして傾城に深くなり、藝者に馴染を重ぬるには、未を築じて出来ないけれど、其方の母は江戸に名うての因業老婆ゆゑ、其方を何う斯うする日には、老婆を敵に持たねばならぬ、敵に持つからには、時宜にまつては喧嘩もしやう、さうなつては家の暖簾に係はる道理、私が儲けて私が遣ふ身代なら、焼いて喰ふども、煮て喰ふども、他人の指圖は入らぬなれど、先祖は過去で睨んで御座る、殊更商人の窮屈なるは、人様の御最負が第一、それを何ぞや、武藏屋の幸次郎は其方に迷ふて身代を疊んだと云はれては、男の一分立たぬ道理、今更悔むも詮ないが、この分別が其方に遇はぬ前に出たなら、苦勞とせず済みしも

のをと、四邊を忍びて男泣き、此方も道理に責められて、たゞ白露に濡るゝのみなり、お君は漸々涙を拂ひ。ああ、何を云ふても妾が悪ふ御座んした、母さんもあのやうな一酷なお方ゆゑこれまでもお腹の立つこともありませんたらうが、足らぬは妾の不束とお許しなされて下されませ、たゞこの上は時節を待つて居りましょと、諦められぬ諦めの辭に、幸次郎は感じ入り、お君よう云ふて呉れた、私も今の辭で安心した、サア、此處に何時までも斯ふやつて居ては、他人の所思もあるもの、彼方へ行って盛でも見やうぢやないか、少とは慰みになるであらう。いゝえ妾しや盛より晴れて遇ふ身になりたいと、拗ねて見せたる糸

薄愛嬌溢るゝばかりなり。
 若旦那、螢が仰山に居ます哩など、供に伴れたる市藏は、
 もぢ張の螢籠に、中は水晶と見るまでに込めたるを手に持ち、
 女中二人と團扇を揮ひて、此方を追ひては彼方に馳せ、流星水
 に閃めけば、柳の蔭に小川あり、月無き夜を一入に、廣尾の野
 邊の一隅は、途下駄の音に、蛙の聲を止めたり。
 お君も螢を撲たんものと、組の帷子の袖を靡かせ、奈良團扇に
 飛び交ふを追ひては、我知らずちよろゝ水の流れるゝ邊へ迷ひ
 入るに、露草茂りて一株の松あり、恐々ながらも螢火亂れ飛ぶ
 向ふを覗けば、闇夜に鏡を見るかと思ふ古池あり、蛙の飛び込

みし音にやあらん、物凄き空に聲いと冴へて、星の影をば亂し
 けり、お君は来ては見しもの、歸だにさへ淋しきに、氣にする
 故か、足下には蛇など這ふにや、草の戦ぐに生きたる心地もあ
 らざりけり。
 思ひ設けぬ池の方の闇にかがみて煙草喫かし居る大男は、身の
 たけ六尺にも近かるべし、布の袋の縫目も烈けぬべきまで螢を
 したゝか入れたるを持つて朱鞘の大小脇狭みし、小倉の袴の股
 立高く、毛脛を半ば露はして、朴の木足駄に、ノツサ〜と寄
 り近づき、雪洞と見るまでに明るき螢の袋を振上げ、闇に透し
 つお君を眺めて。年若い女の子の、藪の中へ踏ん込んでは無ぞ

難儀であらう道を教へて進ぜる、斯う私の跡に踵いて、御座れど無骨に似合ぬ心切に、お君も喜び従ひ行きて、何處の藩のお侍かど、袖の紋をちらりと見れば、替はたしかに薩摩武士、髪かみの結び振り勇ましきよと、思はず見上ぐる顔と顔、粹な盛はたかに見え透きたり。

色は兵子のみと思ひし武士にも、花鳥に眼移りするからは、美みに感ぜざる事のあるべき、流石りやうの無骨も氣遠くなり、世にはまた斯かる美女もあるものかと、我を忘るゝばかりなりしが、俄にわかに氣がつけば心何やら悸々せり、襯衣しんぎの紅の透き徹りて、紹しやうの帷子かたびらを洩るゝ匂ひは、生れて初めて臭かき覺えこれはてんと、堪たま

らぬと、天人の手を引いて、月の都へ行く心地、螢は光る、顔は光る、武士は照れて辭もなく、漸やうやう床几しょうぎの彼方へ出づれば、幸次郎市藏を始めとして、女中までか總そうがり搜し居る最中さいちゆうとて、武士には厚く禮云へば。やヤその禮云はるゝこと嫌ひぢや、拙者せつしやはこれも入らぬから、サア女中に進上する、鳴かぬ螢はたかと思ふて呉れど、歩めば地響きもしさうに大兵の一散走りに跡をみ見ずして立別けり。

二十二

檜ひのの葉蔭はかげの翠色みどり涼しき所には、筋骨逞しき荒男あらしをどの木劍ぼくけん閃かして下々げげ、々々げげと試合しあひの太刀音たちね勇ましく、しかも六月くわつの炎天えんてん、鐵片てつぺん

も鎧けぬべき暑さを、物の數ともせず、塵に塗れ、汗に濡られて、人は七歩の豆ならぬともなほ、釜中にあるの思ひする中に、流石は九州武士の五體に、筋線入れあるほど、笄もて引つ詰髮の小鬢を梳いて。ナンこのこの暑さ、本國の櫻島には火が降つたげなど、肩胛張つて威張れり。

木太刀の響きを、手に取るやうに聞く薩摩屋敷の隅の方に武島軍内といふ武士あり、年は未だ二十五の近侍役を勤めて、力量は五人力をかね、武藝は弓馬刀鎗は愚か、名物の鐵砲は種が島の極意を盡て、一藩中に其名を知られ、鬼神のやうに尊ばれけり、斯かる程の軍内なれば、忠孝の道に志敦く、未だ念友とて

無きまゝ、血起證書く手も無て、むざ〜と暮れ行く春を追ふともなく、この年數までも戀といふもの知らざりし身が、曩の夜廣尾に螢狩の折から、お君が艶色を一目見けるより、現にその面影の纏綿ひて、忘れかぬる儘に、夜はしかすがに、熟睡かれず、晝も思ひに惱されて、替古も書見も手につかばこそ、只管煩惱に苦められければ、大男も病氣には脆く、力落して、夏瘦の一入疲勞を覺ぬ。朋輩には唯所勞と云て試合を断り出仕を休む日の多ければ、藩中一同不審して、軍内の所置に目を注るを、知ぬが佛氣、八疊の間に大の字に寐轉で、八戒の戀の病といふ有様を、莞爾と打笑て入來る出入の刀屋。若且那樣何うか

遊ばしましたか、大層御血色がお悪るい御様子、御服薬でもな
 されてかど、心切こかしに云ひかけたり。
 六藏か近う来い、近う来い、拙者は何處も悪はないと云ば、お
 隠なさいますな、其お顔色のよくないと、何も心配で御座いま
 す。ナニ其方心配ぢやと申すか。へい、御意に御座います。
 左様ならば云つて聞かすことがある。へい、承りませう、そう
 してそのお話ほど、白扇を疊みつ開きつ、頭を仔細ありげに打
 掉り、それからと問ひ詰むれば、軍内は面色朱を注ぎて、仁王
 尊の食傷したるやうに悄悄して。拙者何から話さうやら、譯が
 判らぬと打濁れぬ。

何から話さうかとは大分込み入つたお物語、先づ小口から承
 りませうと膝を進むれば、またも六藏近う寄れと耳元に口を寄
 せて。耻かしい事だが、笑つて呉れるなど念を押すに、此奴戀
 だなど、圖星を中て。ナンのお笑ひ申ませう、遠慮なくお話
 し遊ばしませ、お年若な時分には、耻かしい事の、二度や三度
 は誰しも有り勝、殊にお屋敷には御念友とやら云ふものもあつ
 て……。黙止れ、そのやうな事は聞かぬ哩、その口の軽い鹽
 梅では、云ふて他人に洩れては耻辱だ、云はぬ、えッ云はぬワ
 と腹立たしさの見慕を、舌三寸でまたもころりと温めけり。
 これ六藏、他人には洩らさぬと申したな、それならば云ふて聞

かさう、十日程前の夜の事だが、廣尾の虫屋に美しい女中が居たげな。ナル程、それから何ういたしました。その女中は名をお君といつて豪氣な別嬪ぢやつたが、拙者はその者に惚れた。ナル程な、それから。それで拙者今一目その女中に逢ひたいと思ふが、何處の誰か判らぬので、殆んど當惑いたしたと、玉のやうなる冷汗を握拳に拭ひけり。

刀屋の六藏は可笑しさに堪へぬと、先方が眞面目に云ふ事を、茶にして若しも腹立たれなば年來のお得意も水の泡、それのみか父御の最負も失くなりても屋敷のお出入さへも、叶ぬやうになるかを氣支ひ。へいへい、畏りました、そのお君といふ女中

を切支丹の魔法を以て、近日屹度も目にかけます、さりながら彼女も江戸にて名高き藝者の、暇な日とて無い身ゆゑ、今日や明日など、あつしやれば、この六藏も迷惑いたしますが、お急ぎなくば必ず首尾して上げますと、體好く云ふに、軍内嬉し涙をはらく溢して。忝けない、この通り禮を云ふぞと、兩手を支きて時宜するを、あア勿體ないそのやうな事をなさいますと、私はお目通りには居られませんと、手を押戴きて下座すれば軍内は羞かしがりて、顔さへ擡げ得ず。

戸外は試合果てしと覺しく、名々木劔肩にして、長屋に駈け入る木履の音、雷の如くに聞えぬ。

二十三

戀に寔れ色に凋れし男の、小料理屋の裏二階に、悄然と置物の布袋を眺めて、木彫りの具合の拙いやら、巧やら、そんな所へは目の届かぬ無骨物の軍内は、何を待つにや、床柱に凭れ、身の置所も無氣なる極り悪るさの顔して、酌に出て居る女中の顔を苦り切つて見る不愛嬌に、客には馴れたる者共も、流石に近寄りかねて、旦那は恐いわと立ちかゝるを、何が恐いかと調子高の聲に驚き、銚子を持たず下へ行きけり。風は青簾を洩れて、清涼拭ふが如くなれば、軍内は座に堪えかねる程にはあらぬを、生來酒を嗜まぬにや、目前に並ぶ杯盤狼

藉たるには目も注げず、椽側に出で、伸びをしながら、弗と彼方の座敷を見れば、我が居る一間を二ツ隔て、青桐の葉の夕陽を射けて、翠の色疊に清く落つる處に、簀戸半ば開きて年未だ若き美人とさし向ひに座したるは刀屋の六藏なり。此方の見るに心づかざるか、續けたる談話に澁みなく、折節は煙管をもて、疊に符號の文字など書けば、美人は更に氣の無き様して、座を立たんとしけり、六藏は慌て、お君さん、今のは申藏だ、氣にかけて呉れるなどいふをキツカケに、兩人齊しく立別れて、美人は階下へ、六藏は座敷に戻れば、軍内は不興氣の顔して、酒も無味と眉を擡めぬ。

只今無味くないものが参ります、實は若旦那にも周旋しやうと
 想ひまして、手を代へ品を變へて、口説いて見ましたが、當時
 名うての流行妓とて、なかく降参いたしません、それに彼
 奴、近頃云ひ交した情夫でもあると見えて、挺でも動かぬ様子
 で御座います、あア、仕馴れぬ仕事で酔が醒めた、ドレ一杯ク
 ツとやりませうと、冷えたのを呑み干せば、酌してやらうと銚
 子を持つを、いやこれは若旦那、何うも誠に恐れ入りますと云
 ひ居る中、お君は着代え濟みしと覺しく、水色の絹の帷子に、
 桃色の襯衣襲われたれば、吉野紙に包みたる紅の、幽に匂ふやう
 に思はれて、見る目も清しく、銀地の波に千鳥を光琳風に描け

る扇を、胸の邊に押當て、襟元を煽ぐ毎に、云ふに云はれぬ香
 を送りて、さりとは炎天に、紅梅の薫りもいぶかし。
 旦那様嘸ぞも熱う御座いませう、少と袴なども除り遊ばしませ
 んか、此處は風入も好う御座いますれば、此方でも涼み遊ばし
 ませといふ顔を、軍内半ば鎔解けかゝりたる横目に眺め、今の
 辭に戦と寒氣がして、冷汗は腋の下の雨と降り、顔は酒氣に赧
 として、消えも入りたき風情なるを、見てとりたる六藏、氣轉
 に猪口を進めて、あア若旦那も大分お酔ひ遊ばした様だ。
 何時の間にか日はドンブリと隠れて、鈴虫籠に金鈴の音高くな
 り、座敷には點せし雪洞の下に風通ひて、遊し居る人の袂を吹

くに、軍内も六藏も、酒には最早疲れし頃の、わア好き風がど
 欄干に寄りて、巻き残したる青簾を退くれば、天河高樓の上に流
 れて、人間一滴の涼味深く、氷を賣る男の横町を通り過ぐる後
 に、秋を一荷の肩に載せて、虫賣の行けば、野ども山ども思は
 る、萬瓦の、星明りにそれぞと見えて、この直ぐ横町にある待
 合の武藏野を想ひ出させぬ。

尻の長きは二番煎じの利かぬもの、萬事は近付になつての上
 と、六藏は軍内を勸めて、此家を立出づれば、お君入口まで見
 送りて、お近き中にの糸を引くお世辭に、軍内は逢ふ度ごとに、
 戀慕の念の積り來て、命までもと思ひける

二十四

煩惱の闇に身を置きながらも、なほ戀人の事忘れかねて、葭町
 なるお君の家近くを徘徊歩き、姿見るだに、せめてもの心遣り
 と武島軍内は、兩刀をも佩帶む身の哀れにも、髯も剃らず、月
 代も延びたる儘に蓬々と生やして、今宵も月無きを幸ひと、忍
 び隠れて座敷へ行くを、今かくと待ち居たり。

未だ部屋住みの軍内に、藝者買ひ續けて、手許の困らざる程の
 準備あるべきや、一度や二度は六藏も、親御の顔にて金主した
 りしが、浮氣する資本を『おいそれ』と貸す白痴の、三千世界
 にあらう筈なく、後には刀屋にも突き放されて、今はたゞ喪家

の犬の如く身を頼て、茶屋に呼ぶ事ならざれば、潜みて顔を見るのみを、纒に此世の思ひ出にすること、鐵腕銅顔の武士も、脆きは情の一字なれ。

時鳥の雲井に一聲啼いてより今一聲と待ば間のある後の聲にも増して、自烈體けれど、合圖の礫を投ぐるまでの戀にもあらず、云はは鮑の片思ひにて、彼方は斯くまで暮をも知らざるべきに、惣じ呼聲上げて、世間の人に見咎られ、物笑ひの種もならば、武士道をこの溝板の上に棄てねばならぬ、さればとて逢はで歸るも業腹なりと、漸々近づきて檐下に立寄るに、簀戸を洩るゝ燈火の向ふには、お君の化粧仕直して、鏡臺に顔を埋

め、口紅さし居る後邊の方に、お幣老婆の片裸脱ぎて、頻に團扇を遣ひながら、今宵の客は誰ぢやといふ、誰かは存じませぬが、只今直ぐどのお迎ひ、本町様かも知れませぬ、ですが旦那なら旦那のやうに云ふても來ようと、髮櫛に髪を梳いて、襟元をチヨイと掻き合せぬ。

それならば好いけれど、また先日やうに薩摩さんのお相手などは断る方が好いぞ、祝儀と云つたら目薬程、それにア便々ど何時までも引上げられてたまつたものぢやない、一體武士の癖に藝者買ふなどは了簡違ひだ、薩洲様には、兵子といふものが流行だから、陰間屋へでも行けば好いのに、醉狂にもお前を

呼んで遊ばうなどは、肚胸が太と過ぎるよと、何心なく語る
談話も、戸外に潜む軍内には、いたく肚胸を突きけり。
己れ悪魔め、本國の事を嘲しくさるかと、満身の怒氣迸りて、
腕も自然に鳴りけるが、場所がらとて我慢し、なほも耳を欲つ
れば。一體九州のお侍が、氣ばかり強ふて、氣渡りがなく、藝
者に祝儀を遣る首尾も知らぬ癖に、長尻で甚助で、お客として
は厄介な骨頂、殊に薩摩の御家人なんぞは、正直一方で直ぐに
腹を立てるから恐い、あの國ばかりは命を惜まぬ處ぢやから、
うつかり座敷で不調法などは出来されぬと、意注けるのやら、
陰言を云ふのやら、譯が判らねどお君は頭を傾けて聞きぬ。

軍内は今の辭に茫然たる事良暫時なりしが、餘り腹立たしさに
呆れかへり、俄に我が身に心づきて、打扮を見れば、袴着たる
さへ異なる風俗なるに、斯かる里に大小ぼっこみたる武士の、藝
者屋の前に佇立むも可笑と、行かうかど一足歩めば、後邊の格
子戸さらりと音して、箱丁と共に立出でたるお君、夜目ゆを仔
細には判らねど、小褌とりて蓮歩の輕げなる處、堤灯の火影に
召物の裾のみ嬋妍に透きて、萩の玉川を見せたる水色の、流る
ゝかと思ふばかり、其姿の美くしいには、軍内もまた氣を遠く
して、見え隠れに、行く跡を追ふ風情の淺猿さよ。

少々申談じ度儀有之今夜暮六ツ時より罷出づべく候間他出無之
 御待可被下候と、何かは知らぬと、伯父よりの書簡に、軍内は
 今夜ばかりは、百夜車の忍ぶ戀路を妨げられ、蚊軍共と押寄せ
 来る本城に、行燈を點さず、小暗き書齋に閉ぢ籠りて、想ひは
 早く飛ぶ葭町の天、身は繫がれたる狗の柱をめぐるに齊しく、
 茫然として闇に涼み居ける處へ、玄關より上り込みたる伯父の
 主水、輩下の家にも禮式の袴を脱かず、式臺から太刀を手に提
 げて、勝手口に至れど、軍内は居ず、下男の久助も目に止まら
 ぬに、老人の居ぬ家は、斯う不取締かと、はや小言の種を見つ
 けて、軍内くと呼べば、對立の蔭を折れて、南向きの書齋か

ら、伯父さん先刻よりお待ち申ましたと駈け出づるを、ナニ待
 つて居た、待つて居たものが、夜になつても燈火も點けずに居
 る者があるかと、上段の間に端然と座して、軍内の燈臺に火を
 點くるを睨みつけたり。
 伯父様よう御出で下さいましたといへば、能くもなからうが、
 打捨て置き難き噂を聞きしゆゑ、今夜わざ／＼参つた、親父殿
 が居らるゝ折ならば、なんのこの老罷が出ずとも、事なれど、
 伯父は親に向ふ拙者の黙止つて引込む譯のならぬ大事、精しく
 云はずとも、其方の肚に疚しい事があらば、云つて聽かせよ、
 決して隠し立てをするなど、その顔をまた睨みたり。

伯父の辭に軍内ハツと平伏し、何事かは存じませぬが、私儀肚に疚しい事は露覺えは御座りませぬ、譬ひ他人の噂がありませうとも、それは他所の軍内の事御座りませうと言へば、主水は威猛高になり。黙止れ、其方はそのやうに性根が腐つたか、他所の軍内とは何の口から吐かした、この伯父は眼もある、耳もある、年は老つても、未だ耄祿はいたさぬから、其方に二言は云はさぬぞ、え、口惜しい、拙者を腰抜けと思やるかと、老木の車はらくと袖ぬらしけり。

主水は臉邊を濕して、こりや軍内、其方は身蕪果てた男になつたの、如何に浮世に摺れ、ばとて、この伯父に言語を食んだ

な、この伯父はな、愛に眩んで是迄其方の不行跡は見えなかつたが、世間には眼が充分あるぞ、其方が夜毎に他出するを、知らず贈つた見舞物の、アノ鶏でさへ夜が明ければ時刻を告るに、其方は未だ眼が覺めぬか、え、阿呆者め今藩中で武藝の巧手と指屈らるゝは、賞めるぢやないが、まア其方ぢや、それに何うした天魔の業か相手は知らぬと夜遊びばかり、それで勤が濟むと思ふか、厭やな噂を聞いたから、直ぐ國元の親御の許へ知らさうかとも思つたが、さうしては切腹さするは案の定、殺すも惜しいと耐へたが、耐へ甲斐無い腰抜けと、云ふさへ聲の震はれけり。

軍内は今更恐れ入り、言譯せんにも武士の意地、悪かつた勘辨してと、云ひかねて、たゞ面目無く平伏するを、主水は怒りの聲鋭く、軍内、軍内、これ軍内顔を上げ、なほ云つて聞かす事がある、其方の落度は今取立て、云はぬ程に、これから屹度心を改め、近々に執行あるべき、犬追物には、首尾克勝をとつて呉れ、そうしたら是迄の罪を免して遣はさう、其方の耻辱は親御の耻辱、大にしてはち國の耻辱だ、努疎略には思ふまい、あアこれで用事は濟んだ、邪魔をしたなど、歸り行く後影を見送りて、軍内は挫と身を投げ出し、あア迷ふたり、如何なる事にて、悪魔に魅入れられしぞ、え、口惜やと切齒をなし、男泣きに

泣いても及ばず。

二十六

一旦は穢したる心の、それよりは精進潔齋して、弓矢八幡を祈り、代々傳はる黒革緘の鎧を、軍神八將になぞらへて、一生懸命に勝つ事を所望すれば、お君を戀ふ念の幾分が薄らぎて、またもとの五人力の軍内とはなりけり。

犬追物を執行あるべき當日となれば、場所には十數間の棧敷を構へて、四方竹を以て犬垣を結べり、はや時刻ともなれば、薩摩宰相出座ありて、老臣左右に居列び、執筆、幣描童、射手、奉行など、思ひくの装束なし、今日を晴れとぞ控へたる。

金風四方に渡りて、芝草の露の朝陽に乾けば、見物我先にと詰
めかけて、流石に廣漠たりし下屋敷も、忽ち立錐の餘地だに無
くなりけり。

數番畢りて、頓て十二騎の射手は進めり、烏帽子小素袍被りた
る犬掛の者八人出で、犬を放てば、射手は六騎づゝ立別れて、
側目も振らず射かくるに、いづれも熟練せし者のみなればその
技の美しきこと、紅白相交りたる牡丹の下に、獅子の荒れに荒
るゝが如く、暫時は勝負も判かざるにぞ、見物俄に動揺めき立
て、天地も裂けよと喝采しぬ。
控所にも、ソレ今が肝腎の場所なるぞ、軍内殿は負くるか勝

つか、見て來よくと、附添ひの人を追立ては、雌雄何れに決
するやと、手に汗握るぞ興ありける。

拍手の音の歛れるは勝負の早く決せしにや、折しも軍内は日頃
の勇氣に似もやらで、悄れかへりて控所に入り、素袍を脱ぎ捨
て行膝を、力無氣に解き弓矢傍に置き添ふも、愁に震る顔の色
は、餘所目ながらも氣の毒なり彼方の隅には一ト團結、今日の
勝負を品評して、みな負けたるを嘲口、後邊にその人ありぞと、
知らで幕を一重の誰憚らず、アノ某殿は日頃に無い大の不手
際、殊に我れ等の腑に落ぬは、頃日銘人の武島殿、今日の晴業
に一世の不覺と云はれて一入無念さに、齒を喰ひ切りて悔めど

も、今となつては及ばぬ技、わアこれも誰が爲めぞと、湧き來る涙を噛みべめて、なほ語らふを打聞けば、おうその武島殿が近頃滅切り腕を下げられた原因はと云つば、色のいろはに實が入て、武藝を此とも思はぬからとやと、罵られたる切無さは、腸握んで揉らるゝより、なほ一入の苦痛なりき。

知れる人に顔合はすさへ面目なしと、道ぐるが如く場所を立去り、酒宴の席へも入らずして、下屋敷を一散走りに抜け出で、何處と目的はあらねども、戀しき方に向く足の、金杉橋の邊に來れば、秋とは云へど、夕陽の影の蒸し暑く、雨持つゆゑか風死して、身は焦げるかと思はれたり。

果敢なさや、我も今宵を限れる命、いざ／＼浮世の見納めに、平生は嗜まぬ酒なれど、呑んで心を狂はし見ん、人間二十五年の春、何一事も爲し遂げず、不忠不孝を重ねし上、切腹するは無念なり、冥土に行きて御先祖に何んぞお詫びをいたさうぞ、わア面白からぬ世の中やと、最寄の茶屋へ上り込み、牛飲馬食、庖丁取る者を驚かして、財布の金錢をざらりと出し、戸外に出れば日は暎れて、巷に火影のちらつき初めたり。

今宵亡き身の興無さに、一入戀の捨てかねて、え、儘よ、死んで地獄に落ちなば落ちよ、迷ひし君に今一目と、未練に引くが後髪、弾き出す三絃は何家ぞや、よしそれとても世の中とは、

我身に似たる文句なり、お君は居ずや、出て来ぬか、一目なり
と逢て行き、係をだに目に留て、十方億土の道連にせむ。

二十七

死ぬのしの字は色賣る町での禁句にて、よろづ陽氣を霞町の、
夜の賑はひ懐まじく、長安の春、吉原の夕にも、なか／＼劣ら
ぬ雑沓なり。

色戀は熱くなる程袖濡るし、涙も初手は出ざりしを、あアこの
頃の物思ひ、生きた心地も内證に、逢ふて首尾して顔見ては、
暫時見ぬ間に寝れしぞ。お主も夏瘦し給ひしと、苦勞に疲れ義
理に病み、日一日と鈍もて、二人の肉を削らる思ひ、斯程果敢

無きものならば、互に迷ひ迷はぬものを、悟の初めは迷ひの終
り、今は深淵に嵌り居て、出るに出不れぬ腐れ縁と、幸次郎は
お君の肩に手を置きて、啣ち嘆くも道理なり。

寄れば泣くぞと定めたる、茶屋の奥の間人知れぬ、六疊敷きを
城廓と、忍び込んだる幸次郎は、一寸椽側に立出で、何う
やら降りさうな天氣になつた、ドリヤ店の者のまた案じて呉れ
ぬ前に、早く歸つて喜七にも喜ばさうと帯め直せば、お君は
泣き出して、今夜は種々も話し申すこともあり、聞かねばなら
ぬ譯もあるのに、何日になくさう急がずと、緩々話して下さん
せ、氣強いばかりは男の器量で御座んすまい、少とは妾の心を

察して下さつてもと、實はち怨めしう存じます。此頃ちらりと承はれば、御親類のお媒妁にて、奥様がち極りなさいましたとか、それやこれやの御相談で、ち忙しうはち在ませと、長くとは申しませぬ、今一時の御辛抱と、云ひつゝもまた泣き伏したり。

幸次郎は立膝せし儘、帯の間へ手を入れて、昨夜の夢見と云ひ、今の痕方も無い事と云ひ、今夜は何うやら妙な晩ぢやと云はば、お君はまた先を潜りて昨夜の夢見に好い夢でも御覽遊ばしましたか、嬉しい夢は隠して置いて、妾を泣かする算段ばかり、あア何うしても旦那とは、未遂げられぬ戀なれば、寧そ一思ひ

に諦めやうか、いや〜諦めがつくものなら、何んで苦勞をいたしませう、母さんには責折檻、客は次第に減つて来る、妾はこれ程切無い思ひをいたします、それに先日母さんのおつしやるには、其方の實の母さんは、お冬と云つて本町通りのある大家の奥様なりしが、仔細あつて私の抱へとなり、其方を生んで産後の病死、我手で其方を育てるには、並大抵の事ぢやなかつた、餘人と違ふぞ、浮氣して馴染を減らすなど、殿しい吩咐、それで妾はなほ悲しいと云ふに、幸次郎は不審の眉根を寄せ、ナニ其方の母御はち冬と云つて、本町通りの商家の内儀と、ハテ似た事もあるものぢや、私の祖父様の後妻もお冬、仔細あつ

て離縁したと、父様が逝去られぬ前におつしやつたがと語れば、談話は一入うち濕り、雨夜の伽に似たらんかし。世の中は廣いやうで狭いもの、繋がる縁の其方と私は、以前にそうして關係が無いとも云へぬ、何うせ二人の悪縁は、切つても切れない中なれば、機嫌直して歸つて呉れ、これが別れといふではなし、首尾さへ好ければ、また明日にも逢はれる身だ、ナニ別れて逢ふのが待遠しいと、困らせるな、小見ぢやアあるまいし、大抵にして笑つて呉れ、さう其方が嘘啼泣いて居ると、私までが釣り込まれて、漸と拭いた眼がまた濕つて來た、濕るといへば、何うやらお雨が來さうな空合、降らぬ中に歸つたが

いゝぞ、遅くては老婆の機嫌もよくあるまい、サア私が門口まで送つてやると、云はれてやうく機嫌を直し、そんなら一所に参りましよと、身打扮も手提く懐中鏡に化粧直して、家内に夫々愛嬌溢し、巷に出れば、空摸様の物凄さに、往來はいとも寂寞たり。お君は幸次郎に手を引かれて家まで歸る途中にて、木履踏みかへして鼻緒をブツ、リ、えゝ忌々しい縁喜でもないど、送りの人と五六軒先にて別れぬ。

二十八

雲低く垂れて雨の近きを知られ、風は生暖かにして、何うやら氣味の悪い晩と、路行く人も歩を早むめり、今宵は七月十五夜

の、月はありながら、ありと思はるゝ方のみ、断雲のそれぞと
 明るけれども、韋駄天の天空を駈けり給ふか、雲の脚早くして、
 東に流れ、西に飛び、今もや一夕立の落來べき天色とはなりけ
 り

武島軍内は下屋敷を拔出で、金杉橋の茶屋へ飛び込み、面白
 からぬ腹に酒を煽り、芬々たる酔を吹いて、空合をグツと睨み
 ながら、降るか、え、降るなら天地を洗ふ程した、か降れど、
 袴の股立高く蹇けて、霞町に入ける頃は、提灯の花のちらつき
 ぬ。お君の家に立寄れば、憎しと思ふお幣老婆のみ、火影に背
 きて坐り居けるが、頓ては下婢を呼びつけて、お君は何處へ行

つた、少とでも妾が留守にすると、直ぐ浮氣しくさる、彼女の
 ことだから、役者狂ひもあるまいが、大目に見て置くと方圖が
 無い、矢張人間は叱りつけ、擲り散らして遣はないと増長す
 る、飼犬に手を噛まれるとは好い比喩だ、歸つたら思ふ様折檻
 してやらう、お三、其方心あたりの家へ行つて姐さんと呼んで
 來や、近頃聞けば本町の青二才と、何うやら深い様子、それに
 薩摩の野郎が張りに來て、家の近邊をどろついて歩くさうだ
 が、そんな事が馴染の衆の耳に這入らうものなら、藝者屋が上
 つたりだ、本町の武藏屋が何うした、ア、やうな身代一つで、
 お君を儘にされると思ふか、馬鹿め、青二才め、別けて薩摩の

野郎などは、及びもぬえ事だと罵る辭に、軍内グツと癩に据えかね、またしても悪口吐くか、憎くい奴と切齒しける下婢は戸外に立出でぬ、夜は更け初めぬ、お君の姿は影だに見えず、酒の酔は全く醒めて、思々しさは此上もなし、また歸り行くおでん屋を呼び止め、軍内は思ふさま酒を被ぶるに、天地は不平の氣に充されて、お幣が兩度の悪口を我慢し難く、己れツと怒氣満身に溢れ、腕の我から鳴るを覺えず。

齊しく犬死する身なれば、世の毒蟲のお幣を斬り、加へて本國を嘲りたる、天誅をも知らしてやらんと、格子戸投ぐるやうに開けて、物騒がしきに驚く老婆が襟髪掴み、積悪の報ひ、今ぞ

思ひ知れど、一刀の下に貫徹して、倒るゝ所を篤と見澄まし、おア女々敷き爲所をしたりと云ひつゝ、血刀を神棚の燈火に眺め、大亂れの匂ふばかりの焼刃に酒氣を吹きかけて、無益の殺生ながら、好き試し斬をしたるよと、立出でんとする門口より、お君は座敷の歸りと見え、晴衣の儘に座に入るに、室内は闇々冥々たれば不審ながらも持てる提灯をヌツと出すに何かは知らず、大刀提げて仁王立の大男、貴君はど吃驚して倒れかゝる刹那、免せどの一聲に姿は袈裟懸にバラリズン！

折から電光閃きて、乾坤恰も裂くるが如く、殷々たる雷聲は、天地も壊れ了んぬべきに、大粒の雨ばらりと降り注ぎて、窓

の戸破るゝばかりなり。

軍内は目敏くも電光の光線にお君の顔を覗けば、齒を喰ひ切りて、はや物云はぬ花となりぬ。

惨憺、惨憺、血は流れて壘を浸し、電光の閃めく毎に、虚空を掴めるお幣の屍骸の、青白く照り渡るに目も注げず、軍内は太刀手早く鞘に納めて、お君の側に進み寄り、二聲三聲呼べと叫べど、虫の音程の聲もなし。

しなしたり、其方には遺恨も無かりしものをと、残念がれども詮術無ければ、戀の遺物にこれ貰ふたと、衣桁に懸けある晴衣を外して、篠突く雨を物ともせず、戸外に弗と飛び出せば、水

晶籬も斯くやとまで、怪しまれまる雨の脚、テも心地快く降る奴やと、花を染めたる縮緬の、衣裳を被り股立とりて、駈け出でんとなしけるが、今死ぬる身も情には脆く未練にも一目顔見たやと、縁に片足踏みかけしが、いや／＼、遅れて人目に立たる上、召捕られなどせん日には、恥辱の上の恥辱なり、いふや、最期を急がんと、空をば拵と瞻上ぐれば、霽れかゝる雲に小降となり、電光の闇夜を縫ふ中を、女の衣に髻面包んで、駈け行く足音シット／＼。

二十九

伊皿子大圓寺は薩摩家の菩提所なり、參差たる墳塋に交りて、

切腹堂と俗に呼ぶもの建てり。これ諸士の落度あれば、我ど此堂に入りて自刃し、覺悟の意を一藩に知らする所とぞ。總じて薩摩は武勇を尙ぶの國風なれば、一死を屑ともせず、小どち屋敷の御門限を違へしとて切腹し、死んで七十五日には再生して、また君に仕へ奉るを得るものとの習慣あり。

斯かれば武島軍内も只管に死を急ぎて、大圓寺の石壇をしとくど登るに、白雨の霽れ易すぎ、空は名残なく青味渡りて、風に吹き拂はる、横雲より、嬋研たる月の姿ぞ現はれたる。

石壇に登り詰めて後邊を顧れば、追ひ來る人も無きに安堵し、いざ心安く切腹なさんと、本堂位牌堂に額きて、不忠不幸を詫

び、後生を吊ふて立てば、古松の影は地に落て黒く、人跡絶えて境内の物靜かなること、極樂の浄土とは斯かる處をや云べき

松の樹の間より見るとも無くて、高繩の海うち眺むれば、涙に濡る、誰が袖夕浦の波に、月の碎けてひらくと金蛇の閃く様

凄く、遠く霞みて目もあやなる漫々たる海原の果は我が故郷なり、父御は今しも燈下に好める太刀など引抜きて、焼刃の匂ひをうち眺め、無聊を消し給ふ頃なるに、三百餘里を隔てたる江戸には、我の戀ゆゑに武士道を捨て、今宵此處に相果つる事

ど、夢にも知り給はざるべし、淡路島根に通ふ千鳥はありながら、薩摩の空に飛ぶ鷹は無きか、漁舟の汀に維げる邊は、主君